

---

# ARMORED CORE ANOTHER EPISODE

永月夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ARMORED CORE ANOTHER EPISODE

### 【Nコード】

N1827C

### 【作者名】

永月夏

### 【あらすじ】

ACと呼ばれる人型機動兵器を操り戦場を駆け抜け、報酬さえ払えばどんなに危険な仕事だろうが遂行する彼らは「レイヴン」と呼ばれていた。数年前全てを失った少年は戦場を駆け抜けていた。「レイヴン」として何かを護る為に。

## プロローグ（前書き）

これはゲーム。アーマードコアを下敷きに書いたファン小説です。アーマードコアを知らない人でも理解出来るように書いて行きますので宜しくお願いします。

## プロローグ

平和で平凡な世界。ニュースなどで国際情勢の悪化。レイヴンの暗躍、ACの圧倒的な破壊活動を見ることはあっても小さな小国の田舎町などとは無縁の世界だった。

戦争が起こっているのはこの世界とは違う遠い世界。例えば平行世界とかで起こっているものでそれをブラウン管を通してテレビが移してるんじゃないだろうかと思えるほどに平和な世界だった。

その平和な世界が終わりを告げた時少年は初めて、ACの存在を、本当の戦争を、そして本物のレイヴンを知る事になった。

家が燃え、空一面が赤く染め上がり人々が逃げまとい絶え間なく悲鳴がこだましている。

恐怖と絶望だけが今の世界を支配していた。

すぐ近くで絶望の世界が広がっているというのに、二機のACは全く関係の無いように戦火を交えていた。

銃弾やミサイルの流れ弾が街を破壊し、人を殺していく。

認めたくない現実の中、二人の少年が燃え盛る街から逃げるために走り続けていた。

住宅街を抜けると道が左右に別れている通りに出る。直進すると目の前は海で、ちょっとした崖になっている。少年が右に駆け出すととした瞬間にすぐ背後で爆発が起こった。

少年の身体は紙の様に宙に舞い、海へと落下した……。

人型汎用機動兵器”AC”それを駆り戦場を駆け抜ける者は”レイヴン”と呼ばれていた。レイヴンとは企業や国家から報酬を貰う代わりに戦場を駆け、依頼主からの依頼を達成する者である。傭兵と言う意味を持つレイヴンと言う言葉はまさに彼らの為のものであった。

常に命の危険が付き纏うのだが、レイヴンを志す者は決して少なくは無かった。何故ならレイヴンとして一流になれば、力と富や名声を得る事が出来るからだ。

無論全てのレイヴンが金や名声の為に戦っている訳ではない。レイヴンの中には自らの思想を持ち、特定の勢力と専属的契約を結び、その勢力の為に戦う物も居れば、ただ戦争だけを目的にレイヴンになったものもいる。

とあるレイヴンは”復讐”の為にレイヴンになり数多の戦場を駆け抜け。

ある少年は”何かを護る”為にレイヴンとして戦場を駆け抜け抜ける。

## ブログ（後書き）

気がつけば六月。もうすぐ夏の季節ですね。

永月です。なるべく更新を早くして行きたいと思しますので宜しくお願いします。

## PHASE 01 「守護者」

「フェイス〜。フェイス〜？」

目を覚ますと目の前には少女の顔があった。誰だっけ？ と一瞬本気で考えたが、それは寝ぼけていたからそう思えたただけだ。

フェイスが辺りを見るとACのコックピットの中であることに気がついた。どうやらコックピットの中で眠ってしまったらしい。何かの調整中だったかな。

徐々に目が覚めていき周りの状況が少しずつ分かってきた。その瞬間フェイスは慌てふためいてしまう。

「えっ？ わっ！？ ちょ、リリー、何処に乗ってるの!？」

コックピットの座席に座っているフェイスの目の前に少女の顔があると言っことはフェイスの身体に馬乗りしていると言っ事になる。その事実直面したフェイスは赤面して慌てる。

「わわ、フェイス暴れないで」

「ゴツッ！ ゴンっ！」

「いてえ!!！」

「いたたた・・・」

狭い場所で暴れた為に、何かのボタンや壁に頭を打ちつけた後にフェイスと少女が頭突きを互いにお見舞いしていた。

「何暴れてんだフェイ・・・」

「あっ」

フェイスと少女の声が見事に重なった。上からコックピットを覗き込んでいた男の目になってる。

「まずい誤解されている。即座に判断したフェイスは、

「ち、違っぞこれは。お前が考えているようなことは何もないぞ」  
必死に弁明を訴える。

「そっかそっか。フェイス、お前はそういう男だったのか」

「ち、ちがっ！」

「コンビ解消させてもらいます!!」

「ちっがう!!!」

朝から大変な目に遭っている少年はフェイス「フェザー」。レイヴンである彼は自分のACの点検をメカニックに任せきりにはせず、自分も最低限出来ることは行っている。今回はその途中で眠ってしまい朝の悲劇に直結してしまった訳だ。

「リリーはACコックピットには入らない。危ないんだから」

「はい」

フェイスのお叱りを受けている少女はリリス「ノン」。フェイスより四つ年下で十六歳である。機械に精通している彼女はフェイスの専属オペレーターを務めてはいるものの子供のように無邪気で無防備な彼女は私生活におけるフェイスの頭痛の種でもある。

「いいよなあお前は。リリちゃんのように可愛いオペレーターで。俺もリリちゃんだったらやる気千倍になるんだけどなあ」

「知るか」

このアホな発言をしている軽率男はジド「ラク」。フェイスと同じレイヴンである。フェイスと一緒に依頼をこなすこともあるが、基本的にフェイスとジドはそれぞれ別々の依頼をこなしている。

ちなみにジドのAC名は”アブソリュートゼロ”絶対零度を示す機体名は彼のオペレーターの示す言葉でもある。

この三人の他にもジドのオペレーター。情報収集係兼メカニックを入れて計六人で生活している。一年前までは一人暮らしだったころを思い出しても、少し懐かしく思う今日このごろのフェイスであった。

最初に一緒に暮らすようになったのはジドだ。ジドとはレイヴン採用試験で同期であった。その後にとある依頼で一緒に戦ったのが縁でフェイスのガレージ（レイヴンに与えられるAC倉庫兼マイホーム）に転がり込んできて三体まで組めるガレージの一角を占拠し自分のACを入れてしまった。

次に暮らすようになったのはリリである。ジドと暮らすようにな

つてから初めて一緒に行つた依頼で、破壊された市街地を襲つているACの撃破に赴いた際にフェイスが保護し、その後フェイスの専属オペレーターになった。

他の三人ともかれこれ一年くらいの付き合いになる。

「今日は何か依頼来ているか？」

「少し待って・・・来てるよ」

朝食の席でフェイスが話題を持ち出し、リリがそれに答える。

「研究所施設に赴いて新型MTのテストをして欲しいそうです」

「新型MTのテストか、報酬金は？」

「AC用パーツ。ジエネレーターみたいです」

リリの隣にいたジドがそのリストを見て、歓喜の声をあげる。

「おお！ そのパーツ前から欲しいと思つてたものだ！ フェイス絶対に受けるよ！」

まだ迷っている段階なのだがな。

「ジド。受けるか受けないかはフェイスの自由です。それに貴方が欲しい物なら自分で行くべきではないですか？」

全く持つてその通りです。

氷のように冷たい口調で言ったのはジドの専属オペレーターのセアヌ＝リオン。

「ま、受けるよ。生活費入れないと家計が火の車になるからね。ジド、ジエネレーター替えたら売れよ」

「分かつてるよ」

それから二時間後にACごとヘリで移送される。到着した先は人里離れた山の中で、演習区画に指定されている地域だった。

「作戦領域に到達しました・・・おかしいですねMTの姿がありません」

ヘリから切り離され地面に着地する。

リーダーにも何の反応も示さない、本当にここに新型MTがいるのだろうか。もしかしたらこの依頼は・・・罠。

「フェイス！！ ACを確認しました！」

「ああ、こちらのレーダーにも映っている。どのレイヴンが分かるか？」

「待つてくださいい・・・該当データありません！」

遠くからOBオーバードブーストが起動する音が聞こえたかと思うと、白い閃光を噴出しながら一機のACが突っ込んでくる。

すぐさま、ミサイルのロックオンを開始する。ロックオン時間の短いCPUを使っているので、敵がこちらまで到達する前に六発分のミサイルのロックオンが完了し、トリガーを引く。

六発のミサイルが敵ACに向かって飛んでいくが敵のACは進路を変えることをしない、エクステンションの緊急用ブースターを展開させ瞬時に逃げるつもりか。だが、その考えが浅はかだった事をフェイスは思い知らされる。

敵ACは回避する事をせずミサイルに突っ込んでいく。ミサイルが全弾命中するが敵のACに傷一つついていない。

「なっ!?!」

「・・・」

敵ACに懐に入られブレードがコアに向かって迫る。

エクステンションの緊急用ブースターを左側だけ起動させ、右に回避する。

「・・・」

「この・・・!!」

至近距離から右腕のマシンガンを放ち、敵のACに命中する。いや、敵のACには命中しなかった。敵のACに直撃する以前にACの周囲に球状の膜みたいなものが展開され、それが全ての弾丸を防いでいた。

「なんだこれは!?! リリどうなっている!?!」

「攻撃が弾かれています」

「それは分かってる!」

どんな手品を使っていると言うのだ、こちらの攻撃が全て敵に効果的なダメージを与えられないなんて。

そもそもあの球状の膜は何だ？ あんなものは初めて見る。

攻撃が通用しない相手にはどう足掻いても勝てるはずが無い。逃げるにしても、この状況では逃げるに逃げられない。

なら、一か八かブレードで相手のコアを破壊するしかない。

OBを起動させ一気に敵ACとの間合いを詰める。敵ACは接近を許さない為にミサイルとマシンガンを発射し、弾幕を張る。その弾幕の間をフェイスのACは一気に駆け抜ける。

「うおおおお！！」

「コーヒーは？」

「もらいます」

フェイスは研究所のラウンジで一人の男と会っていた。

「君のおかげで貴重な実験データを取らせてもらったよ。ありがとう」

「いえ・・・」

先の戦闘においてフェイスが交戦したACは通常のACでは無かった。ここの施設で開発、研究を行っている次世代型ACのテストタイプだったらしい。

「私の名前はジャック・O。君の今回の依頼者だ」

「ジャック・O？」

名前くらいは聞いた事がある有名なレイヴンだ。

「すまなかったな、君のACを大破させる結果になってしまった。君の機体は全額負担でここで修理して置こう。二日もあれば終わるはずだから、君もここに泊まっていくといい。君のオペレーターと一緒に」

「ありがとうございます」

「それじゃ、私は用事があるので」

ジャックは立ち上がりラウンジを出て行く。フェイスはソファに横たわりながらさっきの戦闘のことを思い出す。

今までも何度か死を覚悟した瞬間はあったが、あの時はそれまでとは違う本当の死を覚悟した。

OBを起動させ敵の懐に突っ込み、ブレードを振りかざした瞬間にはこちらの機体がバラバラにされていた。あの圧倒的な力が戦場に投入されれば力の均衡が一気に崩れるだろう。

「フェイス。いる？」

「いるよ」

「あ。いたいた。今日ここに泊まることジドに連絡入れておいたから」

「あれ？ 何でお前ここに泊まる事知ってたんだよ？」

「ジャックさんに聞いたよ。フェイスのACバラバラじゃ仕方ないもんね」

傷に塩を塗るマネは止めて欲しいな。少しは大敗を喫して落ち込んでいると言うのに。

次の日にはフェイスの機体の修理作業が始まった。その作業にはフェイスも参加し円滑に作業は進んでいったが、突如として鳴り響いた警報が事態を急変させた。

技術者達がどよめき慌てている。

「て、敵襲だと！？ レイヴンか！？」

「何をそんなに慌てているんですか？ ここには昨日のACがあるんじゃないんですか？」

慌しく行き来をする技術者の一人を捕まえて問いたです。

「"ネクスト"を動かせるパイロットがいないんだ！」

「ネクスト？」

聞きなれない言葉だった。どうやら昨日のACの事を指しているようだ。

「じゃあ、この施設には他にACは無いんですか？」

「"ネクスト"以外には・・・いや、待て！ 第三倉庫に一機だけ

あるはずだ。ネクスト開発過程において作ったプロトタイプのACが！！」

「俺がそのACに搭乗して戦います。俺のオペレーターをオペレーション室にまで案内してください」

「分かった！」

技術者が他の技術者にもその事を伝える。フェイスは第三倉庫にリリはオペレーション室に案内される途中、別れる前にリリが不安そうに言う。

「大丈夫なの？ 初めて乗る機体で戦闘なんて」

「なんとかするしかないな。こんな所で死ぬ訳には行かない。俺もリリも」

第三倉庫に案内されたフェイスは一機のACと対面する。青と白にカラーリングされ、肩には盾のエンブレムが描かれている。

脚部は中量二足。機動性を高く確保した機体か。武装は今までに見た事も無い武器が装備されていた。これもここの施設で開発した物かも知れない。

良く見れば脚部もコアも腕部も頭部も全て見た事のないパーツで構成されている。

「この機体の名前は？」

”ロードガーディアン”だ」

## PHASE02「レイヴンズネスト」

予想よりも守りが薄いとレイヴンは思う。

A Cの開発施設などと言うのだからそれ相応の護衛部隊が配備されていると踏んだからだ。だが、実際にはA Cの足止めにもならないM T部隊しか姿を現さない。

用心しすぎたか。この程度の敵ならば敵のど真ん中へ突っ込んだとしても制圧できるだろう。M Tが何台いようが所詮A C。いや、レイヴンの敵ではない。そう判断したレイヴンはコアパーツに搭載されている機能O Bを起動させる。  
オーバーブースト

O Bは爆発的な推進力を得られるが、エネルギーの消費が激しく長時間の使用は出来ない。主に敵との間合いを詰める時やミサイルなどを回避する際に使う事が多い。

A Cのコア（胸部パーツ）の後ろにある二つのブースターが開き、眩く青白い閃光が噴出し、A Cが加速して行く。その速さはM Tでは捉えきれず易々と防衛線を突破されてしまう。

レイヴンは失笑した。ここに配備されているM Tもどうやら時代遅れの旧式のような。本当にこの先に研究施設などがあるのだろうか。そう疑問に思った瞬間だった、レーダーにミサイルの反応があり目の前からミサイルが飛んでくる。

A CはO Bを解除し、両肩の脇に装備している迎撃ミサイルを発射する。迎撃し切れなかったミサイルは三つ。それらを回避する事は無く右腕のシールドを展開させ防いだ。

爆煙の向こう側からO Bが起動する音が聞こえてくる。レイヴンは失笑ではなくはつきりと笑い出す。

少しは退屈しない相手が出てきたようだ。仕事はこうでなくては面白くない。

煙を切り裂き姿を現したA Cは白と青のカラーリングが施されていた。左腕に装備されているブレードを展開し薙ぎ払ってくる。レ

レーザーブレードとレーザーシールドがぶつかり合い機体が後ろに吹き飛ばされる。

「・・・なんだあのACは？ 見た事が無い機体だ、一般的に流用しているパーツの機体ではないな」

レイヴンは企業が開発したACパーツを使い機体を構成する。よって数いるレイヴンの中ではラジエーター（冷却装置）やジェネレーター（ACにエネルギーを供給するいわば心臓）などの同じパーツを使っているレイヴンもいる。だが、今日の前に現れた敵ACは頭部やコア。脚部や腕部。更に武装も今まで見た事が無い物である。「気を付けてレイヴン。敵のACのデータがまるで無いわ、味方の援軍が到着するまでは無理に仕掛けないで」

「了解した」

オペレーターの言葉を頭に入れながら右腕のマシンガンを構え敵ACに向かって放つ。

「うおおおー！！」

爆煙を突っ切り、敵ACの眼前にまで迫った所で左腕に装備されているレーザーブレード「残影」でコアを薙ぎ払おうとするが、敵ACはシールドを展開させそれを防ぐ。シールドとブレードがぶつかり合い、AC「ロードガーディアン」が敵ACを押し切り機体ごと後方へと吹き飛ばす。

「敵ACを確認しました。」ヘブンスブレイカー”です。厄介な相手ですね」

フェイスの専属オペレーター。リリスIIノンが敵AC名を伝える為に通信を入れてくる。恐らく敵ACのカラーリングと武装。機体の外見や構成から調べてくれたのだろう。

それにしてもしリリが言ったように厄介な相手が来たものとフェイスは苦笑する。

ヘブンスブレイカーと呼ばれるACは”レイヴンズネスト”と呼

ばれる組織の中でも上位の実力者だ。対峙した敵は必ず破壊し見逃す事はないというのでレイヴンの間でも恐れられている存在だ。

黒で統一された機体カラー。

右肩に描かれているエンブレムは、天使の羽を破壊するかのよう  
に剣が突き刺さっている。まさしく”ヘブンスブレイカー”の異名  
どおりである。

ヘブンスブレイカーがマシンガンを構え発砲してくる。フェイス  
はブースターのペダルを踏み抜く。

ロードガーディアンは右側に跳躍してマシンガンの弾を回避する。  
そのままブースターを展開させ素早くヘブンスブレイカーの側面に  
回り込み、右腕に装備されているリニアレルキヤノンを発射する。  
トリガーを一回引くだけで三発の弾が発射される。リニアレルキ  
ヤノンをヘブンスブレイカーは右腕のレーザーシールドでまともに  
受けるが機体に損傷は無い。

かなり防御能力の高いシールドを使っているらしい。今の直撃を  
受ければシールドも破壊されていておかしくは無かつたはずだ。

「リリー。ヘブンスブレイカーは実弾とエネルギーどちらに防御の  
比重を置いている？」

「機体構成から考えると、実弾の防御力の方が高いです」  
「了解」

ヘブンスブレイカーからリニアキャノンのお返しとして放たれた  
十二発の小型ミサイルをOBで振り切り、地面に向けてリニアキャ  
ノンを乱射する。爆煙と砂埃によって周囲の視界が無くなってしま  
い互いに姿を見失う。

その間にロードガーディアンは右腕の武器を捨て、コアのハンガ  
ーユニットから小型レーザーマシンガンを取り出す。

ハンガーユニットは特定のコアに装備されている装置の事で小さ  
めの武器ならそこに収納して運搬する事ができる。

フェイスはレーザーだけを頼りにヘブンスブレイカーの位置を割  
り出し、OBを起動させる。

爆発的に加速するロードガーディアンは目の前に浮かび上がったACのシルエットに向かつて残影で斬りつける。出会い頭の時と同じようにヘブンスブレイカーはシールドで残影を防いでいた。だが、最初の時とは違っていた。ロードガーディアンはほぼ零距离からレーザーマシンガンへブンスブレイカーに向かって乱射する。

すぐさまヘブンスブレイカーはOBを起動させ、間合いを離すが、コアからは火花が散っていた。

「敵AC。コア損傷」

機械の音がコックピットに響き渡る。一気にけりをつけてしまおうかと思っただが、浅かったか。

間合いを離れたヘブンスブレイカーからの攻撃に備える為にブースターを展開させた瞬間、リリから通信が入る。

「敵増援を確認しました。ACのようです。数は一……こ、これはまさか!?」ナ、ナインボール”です!”

「ナインボールだつて?」

思わず聞き返してしまう。

フェイスが動揺するのも無理はない、ナインボールとはハスラーⅡワンという名のレイヴンが駆る機体で全てのレイヴンの頂点に立つ存在だ。その圧倒的な強さは密かなカリスマ性を呼び絶大な人気を誇っている。彼の存在は全てのレイヴンの憧れであり、恐怖でもある。

そのハスラーワンが眼前に迫っているのだ、並みのレイヴンなら逃げ出してしまうであろう。正直フェイスも勝てる自信などない。

ヘブンスブレイカーとロードガーディアンの間に入ってきたナインボールは武器を構える事も無く、攻撃をして来ない。

不審に思っていると向こう側からの通信が入る。音声のみで顔は映らない。

「貴様がフェイスⅡフェザーか」

「何故俺を知っている?」

何時もなら分かってもおかしくはないだろう。レイヴンはACと

搭乗する人物を登録し互いに分かるようになっていたのだから。だが、今フェイスは登録もされていないACに乗っている。

「新たな世界を守護する力。見せてもうらうぞ」

「世界を守護する？ どういうことだ？」

黒と赤にカラーリングされ肩に9と描かれたエンブレムを付けているナインボールはミサイルとレーザーライフルをほぼ同時に放つと上空に飛ぶ。

それらを全て回避し、上空にいるナインボールに向かってミサイルを撃つ。ロードガーディアンに装備されているミサイルはワンロックで八発のミサイルが発射される。しかも、全てのミサイルの軌道が一緒ではない。正面からのミサイルが四発に垂直に上がった後に敵を追尾する垂直ミサイル四発の二点セットだ。

ナインボールは正面から迫るミサイルに向かって左肩に装備されているグレネードを発射した後、デコイを射出し垂直ミサイルを回避する。

「っちー!!」

ミサイルを全て破壊しながら直進してくるグレネードに対し即座にブースターを起動させ右にステップを踏むように回避する。

「コアのおつりだ。持っていけ!」

「んなおつりいるか!!」

背後からヘブンスブレイカーが全ての武装を一齐に発射させる。

マシンガンと十二発のミサイルに右肩に装備されていた自立制御型の移動砲台”オービット”を射出する。

OBでマシンガンとミサイルを回避するが問題はオービットだ。オービットは稼働時間は短いものの、ミサイルよりも高い追尾機能を有しレーザーで攻撃してくる。自立制御型なので一度ロックして射出されれば、何処までも追いかけてくる厄介な代物だ。

OBを持つてもしてもオービットは振り切れず、エネルギーが尽きてしまう前にOBを解除する。後は通常のブースターのみで回避を行われなければならない。

オービットに加えヘブンスブレイカーとナインボールの攻撃を全て回避することは出来なかった。着実にダメージは蓄積されている。何処かのパーツが破損するのも時間の問題かもしれない。

ナインボールのグレネードを回避して着地した場所が陥没し、ロードガーディアンが落下する。その絶好の機会を逃さないようにヘブンスブレイカーがマシンガンを乱射する。

「ここで終わりにしてやる。悪く思っなよ！」

「くっ……!!！」

「諦めないで!!！」

ヘブンスブレイカーのパイロットとリリの声が重なって聞こえて来る。

諦めるつもりなど最初からない。どうせなら最後まであがいてやる。

肩装備のミサイルを発射させようとヘブンスブレイカーをロックした瞬間。目の前に一機のACが躍り出て、マシンガンの雨からロードガーディアンを護る。

「間に合ったようだな」

聞き覚えのある声だった。

「何故邪魔をする？」

乱入してきたACのパイロットに向かってハスラーワンが問いかける。

「このレイヴンは”こちら側”の人間でね。この施設も私達の管理下にあるのだよ。味方を援護して悪い事はなかるう？」

「なるほどな……退くぞここでやり合ってもメリットはない」

「……命拾いしたな」

ナインボールが撤退すると、ヘブンスブレイカーもそれに続く。それを見届けるだけで追撃はしなかったACフォックスアイがこちらを振り向いてくる。

「すまなかったな、遅くなってしまった」

「いえ。ありがとうございます。ですが、どうして助けに来てくれ

たのですか？」

フェイスの質問にジャック・Oは笑う。

「礼を言うのはこちらだな。ここは私達”レイヴンズアーク”の管理下にある場所だからな。

そういえば、君はまだ何処にも属していなかったな。私の元に来ないか？」

「俺が・・・ですか？」

「そうだ。君はきっと優秀なレイヴンになれる。私は君の様な優秀な人材が欲しい」

「少し・・・考えさせてください」

「分かった。明日君のオペレーターの少女と一緒に答えを聞こう」

現在レイヴンは様々な組織に所属している事が多い。その中でもとりわけ強大な力を誇る組織が二つある。一つはハスラーワンが所属している組織「レイヴンズネスト」ともう一つはジャック・Oが主宰を務める「レイヴンズアーク」である。

その二つに所属していないレイヴンは”中立”であるか”企業との専属契約”を結んでいるか”独立勢力”に所属しているかだ。

”レイヴンズネスト”とレイヴンズアーク”それにその他の組織は敵対している訳ではない。アリーナ制度を設け互いの組織のレイヴンと対戦し腕を磨いてもいるし、依頼があれば共に行動する場合もある。つまり全ては依頼しだいと言う事である。それによって敵同士にもなり味方同士にもなる。それがレイヴンの掟だ。

### PHASE03「ナインブレイカー」

レイヴンズアーク。そこには数多くのレイヴンが所属している。レイヴンズアークに所属するレイヴンにはレイヴンズアークから依頼がもたらされる事が多い。無論自分達でも依頼を受ける場合がある。

以前レイヴンズアーク内で行われていた不正行為によってジャック・Oが反乱を起こし、再建した事によって若くしてレイヴンズアークを統べる存在になった。

道中先にレイヴンズアークに所属し活動を行っていた、ジドが説明をしてくれていた。正直フェイスにとってはどうでもいい事が多いがレイヴンズアークに参加するのなら最低知識だけでもあったほうがいいとジドが言った。

あの研究所の襲撃事件から二週間が過ぎた。あの日フェイスはジャックが率いるレイヴンズアークに参加する事を決めた。

フェイスの返事を聞いたジャックはフェイスに”盾”を渡した。ジドが運転しているAC搬送用トレーラーには二台のACが積まれている。ジドの乗る”アブソリュートゼロ”とフェイスがジャックから渡された”ロードガーディアン”だ。

今回はアリーナへの参加の為にレイヴンズアークに赴く事になった。

アリーナとはレイヴン同士が戦い、勝者にはそれに見合った賞金が渡されるというシステムになっている。アリーナにはランキングがあり上位になるほど賞金も高額になっていく。アリーナランキングは主にアリーナで自分よりも上位の者に勝つと上がるが、依頼の達成率などによっても変動していく。

現在全てのレイヴンの頂点にいるのはハスラーワンである。彼がアリーナランキング一位になってからは一度たりともその地位を譲った事が無い。

ちなみにジドは十三位。フェイスは最下位だ。今までアリーナで戦った記録が無いとはいえ昨日今日レイヴンになったばかりの新米ではない、それなのにこの順位とは少しおかしい。

「まあ。今日のお前の敵は七十二位の”アップルボーイ”って言う奴だろ？ お前の敵じゃないさ」

「一ヶ月程前にレイヴンになったらしいな」

「相手が新米だろうと容赦なく賞金をいだたいてこいよ」

そんなこと言われなくても当然そのつもりだ。なぜなら最近めつきり依頼がこないせいでフェイス達の財政は赤字続きなのだ。

このままでは一家六人が路頭に迷ってしまうとフェイスは妄想するが実際的にはそこまで深刻な問題ではない。ただ、このままの赤字状態が続くとACの弾薬補充と修理が出来なくなる。

充分深刻な問題だった、弾薬補給と修理が出来なくなった時点でレイヴンとして終わりだろう。まあいざとなれば借金重ねて”強化人間”にでもなるか。

「おい、お前”強化人間”になるうとか考えてんなよ」  
鋭い。

ACに搭乗しアリーナのゲート前に移動し、システムの最終チェックを行っていた時にジドから言われて焦る。なにしろ凶星だったのだから。

「はっはっは。まさかジド君。僕が”強化人間”に憧れる人間だとも？」

「勿論。そう思っているが？」

「・・・てめえ、貸してる携行型グレネード返せやこら」

「あ。お前の対戦相手の準備が完了したようだぞ。ほら、気合一発行つて来い」

後で覚えてろよ。

思いながら目の前にあるゲートを開ける。

中に入るとそこはドーム型の広い闘技場だった。アリーナには初めて来るが、これほど開放感のある場所だったとは思わなかった。

障害物も何も無いから純粹にレイヴンとしての技量の勝負か。

丁度反対側のゲートが開き対戦するACが入ってくる。

おかしい。

敵のACを見た瞬間フェイスが抱いた疑問だ。機体のベースカラーは赤と言うよりも真紅で間接部分が黒くカラーリングされている。敵ACは一ヶ月程前にレイヴンになった新米のACとしては随分不相应な機体だ。エンブレムは9の文字に四方から剣が突き刺さっている。

コア。腕部。脚部。どれを見ても企業”ミラージユ”製の最新パーツばかりだ。頭部に至っては普通のシヨップでは売っていない物を装備している。

外見だけざっと見てもかなりの高性能機である。この調子だと内部のパーツもかなり高性能だろう。

あの武器は？

敵ACが右腕に持っているレーザーライフルは”カラサワ”と呼ばれている傑作銃の後継機で何処のシヨップを探しても普通は手に入らない代物だ。

”カラサワ”は重量はあるものの、その高い破壊力とそこそこの装弾数と言ったかなりハイレベルでまとまった武器だ。そんな武器を新米レイヴンが持っている時点でおかしすぎる。

「私はイリス」スイト。お前は？」

「・・・俺？」

「お前以外に誰がいる？ 名前くらいは聞いてやる」

「えっと・・・俺はフェイス・・・」

「フェイスか覚えるだけの価値のある名か。私を失望させないでくれよ」

ますますおかしい。まだ実戦経験の浅い新米レイヴンの言動じゃない。それにイリス」スイトって何処かで聞いた事があるぞ。何処だっけかな。

「おい、おかしいぞフェイス」

「ああ。新米には不相応なACだな」

「何言つてんだよ。さつき説明してやっただろ？ イリス「スイト」って言ったらアリーナランキング二位でAC”ナインブレイカー”を駆る超一流レイヴンだぞ！」

「な、なんですと!？」

「さあ、準備はよろしいですね?」

「よくない!

「ちょ、待っ!!」

「では、レディ・・・GO!!」

アナウンスが戦闘開始を告げると同時に、ナインブレイカーはブースターを展開させ球状のアリーナをなぞるように移動しながら右肩に装備されている四発ロケット式の垂直ミサイルを放ってくる。

垂直ミサイルはその名の通り垂直に上昇し、上空からの軌道で向かってくるミサイルだ。通常のミサイルと軌道が違うため迎撃率や回避がしづらいと言うメリットがある。

しかし、垂直ミサイルを回避する方法は意外と簡単だ。ただ前に突っ込めばいいのだから。

フェイスは即座にフルスロットルを入れる。ロードガーディアンがブースターが起動し、機体が前に向かって加速していく。

ミサイルは今までいた位置から前に順番に落ちてくる。

ナインブレイカーの攻撃を回避したフェイスはまだ距離が開いているので、当たればいいやみたいな気持ちで左肩に装備されているミサイルの照準にナインブレイカーを入れトリガーを引く。

「ほう? 見た事がない装備だと思っていたが、面白い武器だ」

正面から四発。垂直に発射され上空から四発のミサイルがナインブレイカーに襲い掛かる。

ナインブレイカーはブースターを使い左上空に飛び、ギリギリまでミサイルを引きつけてから、OBを展開し正面に下降しながら移動する。

標的を見失ったミサイルはあえなく爆発する。

OBを地面に着地する前に解除し。OBでついた勢いで上空を滑るように間合いを詰めてくる。

右腕の武器リニアールキャノンと肩武装のミサイルを同時に発射し、弾幕をはるがナインブレイカーは全ての攻撃を回避しブレードの間合いまで接近する。

ブレードで斬りつけてくるかと思いきや、ナインブレイカーは右腕に持っているレーザーライフルを構える。

「接近戦がブレードのみだと思いついてるのなら、命取りだ」  
「・・・ごもつとも」

高威力のレーザーが右腕を関節部分から吹き飛ばす。武器を握ったままの左腕が後ろに転がっていく。その横をナインブレイカーが通って行き、ある程度の距離を保ちレーザーライフルを構えて向けてくる。

「勝負ありか？」

降参しろと言う事か。口調や言動よりかは優しい性格なのだ。最もこれはアリーナの戦闘だからだろう。戦場ならばそんな情けをかけるはずが無い。

「右腕部破損」

スクリーンにACの立体映像が現れて、右腕に異常があることを知らせる。

言われなくても分かっている。右腕がたった今日の前で吹き飛んだのだからな。直せなかつたらどうしよう。

などピンポイントのずれた事を考えていたが、そういえばと一つの事を思い出す。

このACって右肩装備何だっけ？ と思う。

未だに自分の乗るACの装備全てを把握できていないのかと呆れてはいけない。フェイスとはそういう性格なのだ。

せっかくだからと右肩装備を起動しナインブレイカーをロックする。

ロックオンされた事を悟ったのだろう。ナインブレイカーが移動

を開始するが、照準から外さないようにする。

ロックが完了しトリガーを引いた。

ロードガーディアン の右肩に 装備されていた 巨大な コンテナ から 一回りほど 小さい コンテナ が 三つほど 射出された。

その 三つの コンテナ は おびただしい 数の ミサイル を 射出して いく。 その 量と 来たら 呆然を 通り越して 思わず 笑って しまう。

屋外の 広い 場所で 使用する なら いいの だろうが、 アリーナ という 限られた 空間内 で 使用する 武器 じゃない、 何せ 自分の 機体 に まで 被害 が 及ぶ の だから。

「随分 厄介な 装備 だな！！ ここで 自滅する 気が！？」

「いや あ………？」

ミサイル と 爆煙 で 互いの 機体 を 確認は 出来ない が、 通信 が 入って くる と 言う 事は ナインブレイカー は まだ 健在な の だろう。

「これは あどうした ことか あ！！ 全く アリーナ 内の 状況 が 分かり ません！！ 二機の AC は 無事な の でしょうか！？ レイヴン の 安否 が 気遣われ ます！！」

今まで 無口 だった オペレーター が 状況 を 説明 してくる ように 流れる。 いや、 実は 今までの 戦闘 を 密かに 実況 して いたり して。

ようやく ミサイル が 打ち止め になり 爆煙 が 晴れる と、 アリーナ の 中央 と そこから 右側に 少し 離れた 位置に 二機の AC が 片膝 を ついて いた。

二機 と も 所々 から 火花 が 散り 深刻な ダメージ を 負っていた。 もは や どちら も 戦闘 続行 不可能 と 判断 した アリーナ 運営側 は ドロー という 結論 を 出した。

「フェイス と言った な…… 覚えて おくぞ その 名前」

「…… 戦場 で 会った ら 絶対 殺され そう だな」

イリス の 言葉 に は 確かな 憎悪 と 憤怒 が 含まれて いた の だから、 次に 会う の が 戦場 で 敵 同士 なら 確実に 死ぬ だろう と フェイス は 確信 した。

## PHASE04「ただ復讐の為に」

時として人は様々な試練を与えられる。そして与えられた試練を乗り越えて強くなつていくものだ。

哲学的な格言を今の心境なら作れそうだとフェイスは思う。何故なら彼は今与えられた試練の真つ最中なのだから。

「もうすぐ作戦領域に到達します」

オペレーターのリリが通信で知らせてくる。今は依頼を遂行する為にACごと輸送機で運搬されている。まあレイヴンにとって依頼を遂行することは何の試練にもなりはしない。問題なのは今回の仕事は一人じゃないということだ。

溜息を吐きながら前にいるACを見る。真紅と黒のカラーリングのACはナインブレイカーという機体だ。

そう、アリーナで戦ったあのレイヴンである。名前はイリス。

あの戦闘の後にアリーナ運営側から手違いの知らせがあった。どうやらアリーナ側のミスによってフェイスの対戦相手がイリスになつてしまったようだ。レイヴズネストはその埋め合わせとして、フェイスとイリスの二人に優先的に依頼を回し、現在に至る。

依頼を優先的に回してくれるのはいいが、どうせなら別々の依頼にして欲しかった。

フェイスはレイヴズアークに訴えたい心境だ。そんなフェイスの心境をよそにイリスはあくまでマイペースで行くつもりらしい。

数分前に作戦領域に投下されたフェイスは廃棄された施設の入り口でばーとしていた。

今回の依頼は砂漠の地下に建造された廃棄施設の探索だった。どうも最近武装テロリストらしき集団がこの施設を占拠していると説明を受けた。

依頼を遂行する為に輸送機で運搬され、砂漠に投下され、いざ施設に入ろうとしたら、

「待て。お前はここで待機している」

止められた。

「何故に？」

「限定された空間で、またあのミサイルを使われたらたまったものじゃないからな。武装テロリストの制圧など私一人で充分だ」

などとイリスに言われ大人しく従ったのだ。その為フェイスは暇を持って余していた。

「楽な仕事になりましたね」

「そうだな・・・そういえばリリー」

「なんででしょうか？」

「前から気になっていたが何で仕事の時だけ敬語使うんだ？」

事実、いつものリリーは敬語なんて全く使わないがいざ依頼を遂行する時のオペレーターになるとまるで別人のような口調になる。実は二重人格じゃないのかと一時フェイスは思った。

「セアー又さんに公私混同はしてはいけないと言われまして」

「何か納得できた」

その時だった。コックピット内に警報が鳴り響いた。右側上空からミサイルが飛んで来ている。

レーダーにはACやMT、他の兵器の反応は無い。よほど遠くから発射されたミサイルか、それとも頭部のレーダー機能だけではやはり不十分か。フェイスは軽く舌打ちをして、飛んできたミサイルを回避する。

ロードガーディアンは両肩に武器を装備しているので、ECM対策が万全ではないのが欠点だ。

ミサイル一つ減らしてレーダー取り付けるかな。

考えながら機体をミサイルが飛んできた方に向けるとそこには四脚のACの姿があった。

視認できるほど近くまで接近されていながら、レーダーには何の反応も示さなかったのはどうしてだ。考えられるのは一つしかない。ステルスだ。

レーダーに探知されなくなる装備は確かに存在する。だが、その装備は両肩装備の為、武装が両腕のみになる欠点もあるはずだが、敵A Cは右肩にはミサイル。左肩に連射可能なチェインガン。両腕にはマシンガンを装備している。

「レイヴン・・・ここで始末してやる！！」

「敵A Cはやる気の様です。迎撃してください」

言われなくてもこの状況ではそうするしかない。向かってくるのなら倒すしかない。

O Bを起動し接近してくる敵A Cに向かって左肩のミサイルを発射する。敵A Cはエクステンションの迎撃ミサイルで正面からの四発を防ぐが、上空からの垂直ミサイルが直撃するが、敵A Cは構わず突っ込んでくる。

「あらがうな！」

「つち！！ 随分な重装甲だ」

機動性を無視して防御力だけを特化させた機体か。接近されマシンガンやチェインガンの一斉射撃を浴びせられることだけは避けなくては。

右肩のミサイルを起動し、敵A Cをロックする。一瞬間を置いて、トリガーを引く。それと同時にO Bを起動しその場から後ろへと撤退する。

射出された三つのコンテナからはおびただしい数のミサイルが発射され、それら全てが敵A Cに向かっていく。

「何だこれは！？」

O Bを解除し後ろを振り返った時には勝敗は決っていた。敵A Cは頭部と右腕を無くし、機体の至る所から火花が散っている。

あれだけのミサイルの直撃を食らってよく持ちこたえたものだな。ロードガーディアンは右腕のリニアールキャノンを構える。

「貴様たちレイヴンなど・・・不要な存在なのだ」

「あんたも俺達と同じじゃないか」

「俺は貴様達とは違う、奪う事しか出来ない貴様たちを全て排除す

るためにレイヴンになった。これは復讐なんだ!」  
敵のパイロットの言葉がフェイスにトリガーを引くのを躊躇わせる。

誰に復讐する気だ。口振りからすると恐らく全てのレイヴンに対してだろう、レイヴンというだけで憎しみを募らせているのは何故だ。

そんな答えは最初から持っているだろう。お前も最初は全てのレイヴンに復讐してやると思っていただろう?

もう一人の自分が問い掛けてくる。

確かにその通りだ。もしジドやリリ達に出会わなかったら、どうしていた? 護るべき者などないお前は何を思い生きて来た? 復讐しかないだろう。

ロードガーディアンは構えていたリニアレールキャノンを降ろす。

「・・・機体はまだ動くか? 今すぐここから撤退しろ」

「貴様・・・情けをかけるきか?」

「さあな・・・早く行け。たった今地下で暴れまわっているレイヴンが戻ってきたら、問答無用で討たれるぞ」

「この借りはいつか返す・・・必ずな!」

四脚ACは背を向けるとOBを起動し戦闘領域から離脱して行く。離脱して行くのをフェイスが見送っていると通信が入る。

「地下の制圧を完了した。そちらに変わったことは?」

「特に無いな。ところでちゃんと報酬は分けてくれるんだろうな?」

「・・・金の亡者かお前は」

悪かったね。そろそろ本当にお金を入れないと一家六人路頭に迷ってしまうんだよ。そんな財政状況だからがめつくもなるさ。

後日。依頼の報酬とは別にイリスからお金が送金されて来た。かなりの額だった。ジドはその額に普通に喜び、セアー又とフェイスそれにリリは首を傾げていた。

一体何の為にイリスはこんな大金を送って来たのだろうか。その答えはフェイス宛に送信されていたメールの中にあった。

あの時の依頼で敵A Cと戦い撃破した。その金はそいつの報奨金だ。お前が自由に使うと良い。正直敵を見逃とはどこの馬鹿だと思ったが、他の例を見ない面白い奴だ。アリーナ側のミスでお前と戦えた事は悪くは無かったのかもしれないな。だが、戦場で会った時は容赦はしない。そのつもりでいろ。

やれやれ。レイヴンとして他の例を見ないのはお互い様だと思っがね。

メールを読み終えたフェイスはもう一度大金に一瞥し、今日のこの飯はご馳走にでもしようかと思う。

「例の二人の様子はどうか？」

「サンプルデータが少なく確証を得る事は出来ませんが、”本物”である確率が高いと思われます・・・特にフェイス”フェザー”についてはレイヴンとして一線級とは言えませんが。あのハスラーワンとレイヴンズネストの上位実力者であるノーズ”デトネイター”。二人を相手にしていた時の戦い方の一部に”彼”と酷似しているデータもあります」

「そうか・・・我々に残された時間は少ない。なんとしてもこの計画だけは成功させなくては、我々人類に未来は無い」

椅子に座りながら窓の外を眺める。そこには多くのビルが立ち並び、遙か下の地上では大勢の人が道を歩いていた。

「貴方はその未来を誰に託そうと思っているのですか？」

「・・・もう決めているさ。私も、そしてハスラーワン・・・ナインボールもな」

## PHASE05「救世の歯車：前編」

輸送機ヘリが、目標地点に到達する。ヘリのハンガーには一機のAC。ロードガーディアンが収められていた。

「おかしいですね。攻撃を受けている様子がありませんが？」

「降ろしてくれ調べてみる」

ハンガーから切り離され、地面に着地する。肉眼で辺りを見回しても攻撃を受けた様子は無く、レーダーにも何の反応も無かった。いや、地下にMTかACの反応があつたが、すぐに消える。

不審に思っているが一機の輸送ヘリが上空から近づいて来た。

「あのAC・・・まさか・・・」

輸送ヘリのハンガーからACが切り離され、目の前に着地する。

「所属不明機と聞いていたが、お前だったとはな」

真紅と黒のカラーリングで肩のエンブレムは9の数字に四方から剣が刺さっている。

ナインブレイカーはACの戦闘モードを起動し右腕のレーザーライフルを構える。

「待て！ 俺も依頼を受けてたつたい来た所だ、攻撃を受けている様子なんか無かった」

「・・・命欲しさのそんなでまかせを私が信じるとでも思うのか？ 依頼には所属不明機からの攻撃を受けているとあつた。そしてここにお前が居た。それが何を意味するのか考えるまでもない」

「俺もそれと全く同じ依頼でここに来たんだ、だが。攻撃を受けている様子なんか無かった」

「もう少しマシな奴だとは思っていたが、この後に及んで命欲しさのでまかせか。貴様には失望したここで消える！！」

「・・・ナインブレイカーはやる気の様です。迎撃してください」  
「でも・・・だけどっ！」

フルスロットルでブースターを起動しナインブレイカーのレーザー

「ライフルを回避しながらどうにか戦いを回避する方法を模索していたが、何も浮かんで来ない。

「何故戦わない。いつまでも逃げ続けられるとも思っているのか？」

「ナインブレイカーからミサイルが発射される。ロードガーディアンはOBを起動しミサイルの軌道から逃れるが、OBを解除し着地した先にレーザーライフルが飛んで来る。それをエクステンションの緊急ブースターを起動し回避しようとするが、左肩を掠める。

「知っている人間だから、討ちたくないと言うのか？」

「・・・」

「知り合いと言えど、戦場で会ったのなら敵同士。それが私達レイヴンだ」

「そうだとしても、ここで俺達が戦うのは間違ってる！」

「言ったはずだ。戦場で会ったら容赦はしないと！」

数日前。

ネギに牛肉に卵にごぼうにしらたきに白菜に・・・その他色々。

フェイスは車のトランクに積んである食材を持っているリストと照らし合わせてみる。

「すき焼きに必要な食材は全て買ったはずだし、ジドとリリーに頼まれた物も買ってあるし、大丈夫だと思い、トランクを閉めようとする。」

「んだとこいつっ！！」

街中にいきなり響いた大声に何事かと道を歩いていたら人たちが一斉に声のした方を見るとそこには三人の男に囲まれている女の人の姿があった。男達は酔っ払っていて、危ない雰囲気だ。

道には大勢の人たちがいるが、誰もが皆遠巻きに見ているだけで、助けようとはしなかった。ギャラリーの半分は自分には関係ないと見てみぬ振りをし、後の半分はこのあとどうなるのか面白がっている。

トランクを閉めたフェイスは、一度三人の男と言い争っている女の方に一瞥をして、助手席のドアを開けて、シートの上に置いてあった袋から一本のパンを取り出と、ドアを閉める。

パンで肩を叩きながら、ゆっくりと近づいていくと、女とフェイスの目が合った。男三人は背後から近づいて来ているフェイスに気づいていない。

「なんとか言えって……」

男の一人の言葉が中断されたのは、何者かに後頭部を強打され、失神したからだ。

それを合図に、女は右側にいた男の右腕を掴み、足を払い男を軽々と投げ飛ばす。左側にいた男は仲間二人が即座にやられたのを見て、逃げ出そうとしたが、目の前を一本のパンが塞いだ。

「冷凍パンは、いかがですか？」

「どけっ!!」

「男がよつてたかって女の人に言い寄るのはみつともないね。というわけで成敗」

カチカチに凍った冷凍パン（通称殺人パン）が男の腹部にめり込む。腹部と言うよりもみぞにでも入ったのか、息が出来なさそうに苦しそうだったので、後頭部を強打し、お花畑の世界へと旅立たせる。

「死んでないよな・・・多分」

地面と仲良くしている男を冷凍パンでつついてみる。反応が無いが、一応生きているだろう。多分。

「大丈夫ですか？」

立ち上がり女の人と向かい合ってフェイスは初めて気がついた。目の前にいる女の人とは間違いなく美人という類に入ると。なぜか眉

を吊り上げ、口をへの字にしている顔だが。笑えばさぞかし可愛いだろうな。

「どうして助けたの？ 誰も助けしてくれなんて言ってないわ、それで恩を売ってさぞかし良い気持ち？」

前言撤回。可愛いくない。物凄く可愛いくない。少し前に会ったどこぞの誰かに似ているような気がする。

「いや、別に・・・そんなことは」

「言っておくけど、お金なら払わないし、恩を受けたとも思っていない・・・まあでも・・・一応礼は言っておく。ありがとう」

照れくさそうに顔を背けながら言う。恐らく普段から人にお礼を言う事などあまり無いのだろう。そのありがとこの響きは何処かきこちなさを感じる。

「私はイリス＝スワイト」

「・・・はっ？」

危うく持っていた冷凍パンを自分の足に落してしまう所だった。こんな嘘のようなことってあるんだな。なんて狭い世間なのだろうか。

遠い空を眺めながらこの世の儚さを感じていると、現実を引き戻される。

「なによその変な声。まあいいわそれであなたは？」

「あ、ああ・・・僕は・・・エヴァンジュ」

どうしてかフェイスは自分の名前を名乗れなかった。名乗った瞬間殺されそうな気がするし。

「エヴァンジュ？ 何処かで聞いた事があるな・・・」

「き、気のせいじゃない？」

咄嗟に出たエヴァンジュと言う偽名は、過去と一緒に仕事をした事があるレイヴンの名前である。それ以降会った事が無いし、レイヴズネストやアークにはいなかったことから、特定の勢力には加担していないのかもしれない。

「なんだなんだ、買物そっこのけでナンパか？」

声に振り返るとジドが立っていた。嫌な予感を感じたフェイスはジドの口が開くよりも早く口を塞ぎ、羽交い絞めにしてイリスに背中を向ける。

「何でお前がここにいるんだよ!？」

もちろん小声で叫ぶ。

「何でってセアーヌがお前に頼み忘れた物があるって言われて自転車で追いかけてきたんだぞ」

「よし。分かった。それは後で買うとして、とりあえず俺の名前を絶対に呼ぶなよ。これからはエヴァンジュで通せ。OK?」

「な、なんか良く分かんが、鬼気迫るものがあるな」

ゴホン。とわざとらしい咳払いをしながら、イリスに向き直り、ジドを紹介する。

本当ならこの時点でジドを追っ払っておけば良かったのだ。時としてジドはフェイスの予想外の行動をする。この時もその例に漏れず、予想外の行動を起こしてくれた。

今夜の晚餐”すき焼きパーティ”にイリスを招待した。いや、招待と言うよりは強引に誘ったと言うのが正しいだろうが、そこで反対するのも不自然だったので、フェイスは口を挟めなかった。

意外な事にイリスはあっさりジドの招待を受けた。フェイスが不思議に思い横目で、助手席に乗り込むイリスを見ると、その顔には不気味な微笑が浮かんでいた。

「確かめたい事もあるしな・・・」

そのイリスが呟いた言葉をフェイスは聞き逃さなかった。

どんな小さな音も聞き逃さないそれを世間一般的には地獄耳と言う。

家に帰り着くと、とりあえず全員に大まかな事情を話しエヴァンジュと呼んでもらう事にしたし、ガレージに安置されているACを絶対に見られないようにした。最もジドの機体は見られてもいいが、努力の甲斐あってか、すき焼きパーティは何事もなく、平和的に過ぎて行き。ジドがビールの一気飲みをして、そんなジドをセアー

又が睨んでいて、リリはお酒が飲めないからオレンジジュースを飲んでいて、フェイスの情報屋のラインがギターを取り出し演奏したりしていた。その様子をにこやかな笑顔で見守っていたイリスが何処か恐ろしいとフェイスは思う。

目を覚ましたフェイスは床に敷いたカーペットと仲良くしていた体勢から起き上がり、辺りを見回す。

テーブルの上にはすき焼きの残骸とビールの空き缶などが散乱していた。ソファにはリリとセアーヌが寝ていて、その周辺に男三人衆が仲良く屍となっていた。

どうやら何時の間にか寝てしまっていたようだ。もう一度床と仲良くしようと倒れこんだ時に、

「起きたか？ フェイス」フェザー」

心臓を両手で握られた感じに囚われた。今の声は紛れもなくイリスのものだ、やはり最初から何らかの目的があつて着いて来たのか。起き上がりもう一度辺りを見回すが、イリスが何処にいるのか分からなかった。

窓が開いていることに気がつく。窓の外にある庭のベンチにはイリスが一人で座っていた。フェイスは素足のまま庭に出て近づく。

「悪いが、ガレージにあるACを見せてもらった」

「そっか」

「分からない奴だな。どうして偽名を名乗る必要があつたのか、さっぱり分からない」

「一身上の都合つてやつだよ。そっちこそどうして誘われるままに着いてきたんだ」

「お前がエヴァンジュと名乗った時点で引つかかっていた。エヴァンジュという奴とは一度アリーナで対戦した事があるが、口振りからしてお前とは全然違っていた。どちらかと言えば自分から厄介ごととに首を突っ込むお人好しさから言つて、戦場で対峙したACを逃したフェイスって感じだった。まあ確かめたかったと言うのが本音だな。少なくともフェイス」フェザーはどこか他のやつとは違つて

いたからな。興味があった」

言い終わると、イリスは空を見上げた。フェイスも同じく空を見上げる。そこには星と満月が浮かび上がっていた。

この辺りには企業の工場もないので、ACを積んだ輸送機や戦闘機などが飛び回ることなどほとんどなかった。平和そのものだ。

「フェイス。どうしてレイヴンになった？」

「・・・どうしてだろう？」

フェイスの答えにイリスは怪訝そうな顔を向けてくる。しかしフェイスにしてもそんな表情で見られても困ってしまう。嘘は言っていないのだから。

「本当だよ。俺は子供の頃とここ数年の記憶しかないんだ。気がついたらレイヴンになって戦場を駆けていた。だけど、俺はレイヴンとして何かを護りたかったからレイヴンになったんだと思う」

「そうか」

それだけを言うとイリスは口を閉ざす。フェイスも何を話したらいいのか分からずにいる。沈黙が訪れるが、何処からか聞こえてくる虫の音に耳を傾けてるのも悪くはなかった。

「ナインボール。あのACを、ハスラーワンというレイヴンを消す事こそが、私の生きる理由」

沈黙を破って独り言のように呟き出したのはイリスだ。

満月の下で人気のない市街地のベンチで、フェイスはイリスの考えた作り話を聞いていた。その話はとても悲しい物語で、どこかあの時の自分に似ていると感じていた。

数日後。

「現在、所属不明機の攻撃を受けている。こちらも応戦中だが長くは持ちそうにない、そこでレイヴンの力を借りたいと思う。どうかこの依頼を受けて欲しい。なお所属不明機はエネルギー系の装備で固めている。エネルギー防御を万全にできてほしい」

今ある依頼はこれだけだった。別に無視しても良かったのだ。依頼主が独立勢力でおまけにジャックがアークに反旗を翻した混乱に

乗じてレイヴンズアークの管理地区だった” R13ガレージ”を占拠したという過去があるので胡散臭かった。

とは言うものの、依頼成功の報酬が桁外れに多かったのでフェイスはこの依頼を受ける事にした。依頼を選び好んでいるべきではないだ。

しかしこの時の彼はまだ数時間後に待ち受けている運命をまだ知らなかった。この依頼が自分にとってどれほどの影響を及ぼすのか、まだ知らなかったのだ。

「戦うことこそがレイヴンの本質だ」

「なら、もう何も言わない。向かってくるのなら君を討つ」

通信は声のみで相手の表情は分からないが、イリスは笑ったような気がする。

ナインブレイカーとロードガーディアンは互いにブースターを起動し、距離を離しながら互いの右腕に装備されている武器とミサイルを撃ち合う。

二機のACCの戦いを崖の上から眺めている三機のACCの姿があった。一機は赤にカラーリングされ右肩に9の文字のエンブレムが描かれている機体だ。

「この戦いで全てが分かる。あの二人が”本物”なのかが」

「この世界の”希望”であるかどうか」

中量二脚をベースにコア、腕、頭部はもちろん。ジェネレーター、ラジエーターと言った内部の物まで重量をギリギリまで抑え、高い機動性を確保しているナインブレイカー。その反面防御が薄いのが弱点だが、ナインブレイカーを操っているのはこれまでも幾多の死線を抜けて来た一流のレイヴンである、イリス・スウイト。彼女の手によって操られるナインブレイカーはその高い機動性を生かし、敵の攻撃を回避する事で弱点を補っている。

弾速の遅いバズーカやグレネードといった高火力の武器は勿論、弾速が早いライフルやハンドガン、そしてロック機能が備わっているミサイルでさえナインブレイカーを捉え致命的な損傷を与える事ができない。

並みのレイヴンなら一撃も攻撃を当たる前に接近され、左腕に装備されているブレードでコアごと真つ二つにされるだろう。

軽く被弾はしているものの、ロードガーディアンのコアが真つ二つにされていない理由は、ナインブレイカーがうかつに接近できない要素があるからだ。

その要素はロードガーディアンの右肩に装備されている特殊弾倉ミサイルにある。ナインブレイカーは先のアリーナ戦でミサイルの存在を知らずに射程距離内にまで入ってしまったことに隙があった。しかし今回は先の戦闘での過ちを繰り返さない。ある一定の距離を保ちながら、ミサイルやレーザーライフルを撃つて来る。

ロードガーディアンにはナインブレイカーほどの機動性が無い。機体コンセプトが圧倒的に違うからである。防御を無視して機動性を重視したコンセプトのナインブレイカー。それに対し機動性を最低限確保し、防御力もある程度確保している。つまり全てにおいて平均的な性能である。

加えて操縦者であるフェイスとイリスの技量の差が中距離間の攻

防において、無傷のナインブレイカーと軽く被弾したロードガーデ  
イアンとなる。

「貴様の力はその程度か？」

冷然と言い放ち、左肩装備のミサイル。右腕装備のレーザーライフ  
ル。そして右肩に装備して今まで一度も使っていなかったグレ  
ネードランチャーを背中から肩へとスライドさせ、全ての装備を一  
斉に発射する。

「っち！」

威力の高いグレネードとライフルだけは絶対に回避しなければな  
らない。どちらかが当たれば何処かのパーツが一撃で吹き飛ばされ  
る。

そう判断したフェイスは、一番弾速の早い青白いレーザーをブー  
スターを起動し右に移動しながら避ける。すぐ左をグレネードとレ  
ーザーが通過していき、すぐ後ろで爆発する。今度は上空から迫っ  
てきている六発のミサイルを後ろに退きながら、右腕装備のリニア  
レールキャノンで撃ち落とす。そのまま後ろへ滑りながら建物の影に  
入る。

ナインブレイカーが建物に隠れ見えなくなるが、建物越しにロッ  
クオンしている。右肩の特殊弾倉ミサイルはロックに時間が掛かる  
為、ナインブレイカーに動き回られると照準が合わずロックできな  
いが、今ならその時間がある。

緑色のロックマークが赤色に変化する。ロックオン完了だ。ナイ  
ンブレイカーの弾幕が切れるのを見計らって、建物の影から飛び出  
し、トリガーに指を賭ける。

「っ！？」

目の前にはナインブレイカーの姿がなかった。その代わりにダミ  
ーバルーンが浮かんでいる。さつきからずっとこのダミーバルーン  
をロックしていたのだ。

レーザーを見ると後ろ側に反応がある。出来る限り速く旋回し後  
ろを振り向き空を仰ぐ。

遙か上空に一機のACの姿があった。少しずつ下降してきている。  
「終わりだつ!!」

ナインブレイカーが持てる装備の全てを一齐に発射する。それは空から降り注ぐ無数の雨となって、ロードガーディアンに降り注ぐ。  
「間に合え!!」

OBを起動し回避しようとするロードガーディアンだが、間に合わなかった。レーザーが右肩装備のミサイルを撃ち抜き爆発する。その爆風で機体が前に吹き飛ばされ、そこにミサイルの雨が降り注ぎ、最後にグレネードが着弾する。

「大丈夫ですか!? フェイス!? 返事をしてください!!」  
通信装置が破壊されている訳ではない。リリの声ははっきりとコックピット内に聞こえているが、フェイスにはその声は届かない。

グレネードは直撃こそはしなかったが、その爆風で頭部と右腕が吹き飛ばされた。操縦者にとっての衝撃はOBを起動したときの何倍も大きかった。

コアと脚部から火花が散り立っているのもやっとと言う状態のロードガーディアンの前にナインブレイカーが着地し、レーザーライフルを向ける。

イリスが残り弾数に目をやると、弾薬をほとんど使い切っていた。思っていたよりも苦戦したようだ。ここまで弾薬を使うとは。

「これで・・・本当に終わりだ」

「フェイス!! 返事してよ!!」

「この声・・・あいつのオペレーター? 確か・・・リリス」

少しだけ、ほんの一瞬だけだがイリスはトリガーを引く事をためらうが、トリガーを引き抜いた。

レーザーライフルから青白いレーザーが放たれ、その光は一直線に進み目の前のロードガーディアンのすぐ右横を通過する。

「なっ!? 馬鹿な!!」

わざとイリスが照準をずらしたのではない。本来ならレーザーはロードガーディアンのコアを貫くはずだった。だが、外れてしまう。

それはロードガーディアンが右に避けたためだ。

「あの状態で動けるといふのかっ!？」

「お前達は何故現れる？」

「なに？」

「何故・・・邪魔をする？」

「なにを言っている？」

「あくまで邪魔をするというのなら・・・目障りだ!! 消え失せろ！」

ロードガーディアンはOBを起動し一直線にナインブレイカーへと向かう。ナインブレイカーはミサイルで迎撃しようとするが、六発のミサイル全てをナインブレイカーへと一直線に向かったままロードガーディアンは回避する。

「なんだ・・・これは!？」

明らかに先ほどまでとは動きが違っていった。弾幕を張ってもそれらを全て抜け接近してくるロードガーディアンの前にイリスは恐怖を覚えていた。

どうやってぐぐり抜けてきている。OBを起動し右と左の横移動だけで。

近距離まで接近した所でロードガーディアンはOBを解除しブレードを展開し斬りかかって来る。ナインブレイカーもブレードを展開し応戦する。

二機が交差した刹那。ナインブレイカーの左腕が地面に落下する。「くっ!！」

旋回し振り返った瞬間には、既に目の前のロードガーディアンはこちらを向いており、OBを起動していた。

回避する間もなく機体ごとぶつけられる。そのままナインブレイカーは機体ごと後ろに持っていかれ、ガレージの壁を破り、内部の壁にぶつかりようやく止まる。

「コア損傷。脚部損傷。左腕破損。グレネード応答なし。ブースターも起動しないか・・・これ以上の戦闘は無理か」

恐らく目の前のロードガーディアンももう動かないだろう。互いに戦闘不能。決着はつかずで引き分けた。

「つくづく・・・お前とは引き分けになるようだな」

通信機能が壊れているわけではないが、フェイスからの返事が無い。先ほどからオープンチャンネルで聞こえてくるリリスの声から察するに気絶でもしたのだろう。

まさか死んだのではないだろうなと考えながらイリスが溜息を吐きシートにもたれかかった時だった。コックピット内の警報が鳴り響き、レーダーにACの反応がある。

目の前にはロードガーディアンの機影。その向こう側は壊された壁がある。その壁の穴から一機のACが入ってくる。紫色にカラーリングされている機体だ。

「お前達に依頼したのはこの俺さ。そうとも知らずに潰しあつてくれて・・・おめでたい奴らだぜ。だが、安心しな。お前達の報奨金はこの俺がもらつてやる」

「その機体。確かズペン・L・ゲヌビ・・・か」

「ふっ、やはり俺くらいレイヴンともなると知られていて・・・」

ズペンの言葉を遮るようにイリスが笑い出す。それは面白い事を思い出したような含み笑いから、人をあざ笑うかのように変わる。

「何がおかしい？」

「貴様ごとき小物では、私はおるかそこに転がっているフェイスさえも今この場所で倒す事はできないな」

今度はズペンがイリスの言葉に対し笑い出す。高らかなその笑い声は聞く者全てに不快感を与えるようなものだった。

「その機体でどうしようというのだ？ もはや動く事さえも出来ないんじゃないか？」

「やれやれ。まだ気づいていないのか？ どうやらおめでたいのは貴様の方だったな」

不可解なイリスの言葉にズペンが問い返そうとした時だった。右側の壁を木っ端微塵に吹き飛ばし二機のACがズペンのACとナイ

ンブレイカー、ロードガーディアンの間割ってはいらぬ。

「なつ・・・!? お前はっ!?!」

重量二脚の脚部に加えコア、腕部。頭部に至るまで装甲の硬い重装型のパーツで構成されているAC。フォックスアイを見たズペンは驚愕の声を発する。

それは至極当然な反応だった。ズペンと言う男は今までだまし討ちをしたり、裏切ったりして来たレイヴンだ。はっきり言えば腕は二流以下と言ってもいいだろう。そんな男は自分の計画に少しでも狂いが生ずるとそれが例えどんな些細な事でも大げさに驚く。最も今回の狂いは些細なものではないが。

「レイヴンズアーク主宰。ジャック・Oだ。最近依頼を装いだまし討ちをしてくるレイヴンがいると報告があつてな。調べていた所に張本人と出会えて手間が省けた」

フォックスアイが右腕に装備している高出力レーザーライフル”カラサワ”を構える。これはナインブレイカーが装備している”カラサワMK2”より旧式に当たるが後継機であるはずの”カラサワMK2”よりも高い数値の性能を示している。

出力。装弾数。重量。連射速度。照準補正。どれをとつても旧式の”カラサワ”のほうが優れている。なお現存しているのはフォックスアイが持つているものしか確認されていない。

「レイヴンの誇りもない貴様を生かしておくつもりはない」

「こ、ここでやられてたまるかよ!」

ズペンは戦おうともせず、ブースターを起動し後ろに後退する。フォックスアイは構えた”カラサワ”を降ろす。

「マヤ」

「了解しました」

フォックスアイの隣にいたシルバーのカラーリングのAC”ミッシング”はOBを起動し逃げたズペンを追撃する。

二機がガレージから出て行くと、フォックスアイは後ろを振り返る。

「機体は動くか？」

「いや、もうほとんど大破している。機体が爆発しなかっただけでもマシだな」

「そうか・・・戦闘は見させてもらったよ」

「おかしな依頼主だな。私にフェイスと本気で戦うように依頼しておいて、あくまでスペンの依頼を受けたかのように装って戦えというのはな。だが・・・結果は予想以上だった。そうだろ？」

最後にロードガーディアンが見せた動きはイリス。そしてジャックにとっても予想以上だった。あれがフェイスというレイヴンの本当の実力なのだろうか。だとしたら自分達はもはや彼に勝てないということを知ったのだ。

「彼が謎の言葉を発した後の事だな」

「聞いていたなら話は早い。フェイスは一体何のことを言っていた？」

ジャックは黙ったまま少しの時間が過ぎていった。イリスはその間機体のチェックをしながら、グレナードと左腕がもはや使い物にならなくなっていたので、後でフェイスに弁償させようかと考えていた時に。

「アークの回収部隊をこちらへ向かわせている、それまでここでじっとしている」

「了解だ」

結局ジャックは明確な回答はしなかった。それに少しだけ歯痒く思ったイリスだが、それ以上の追及はしない。

その時、ガレージの外で何か爆発する音が聞こえてくる。どうやら決着がついたようだ。結果は既に見えているが。

逃げたACを追撃するためにOBを起動しガレージを飛び出したAC“ミッシング”を駆るのはマーヤ・アドレイド。ジャックの側近としてACを駆る彼女はレイヴンではないがその実力はアーナ

でも上位レイヴンに匹敵するとも言われている。

軽量二脚。全てのパーツが軽量系で構成されたミッシングはナイフブレイカー以上の機動性を保持している。更に両肩装備の推進ブースターを装備している。完全に高速戦闘に特化している機体だ。

武装は両腕がブレードになっているデュアルブレードのみとなっている。並みのレイヴンがこんな装備をすればただの自殺行為だが、マヤの実力で駆れば相手の攻撃を全て回避し接近し両腕のブレードで両断する。最強のブレードオンリーACとなる。

「じよ、冗談じゃっ・・・！」

勝負は一瞬だった。追いつかれたと悟ったズペンが機体を振り向かせ迎撃しようとした瞬間には既にブレードが展開されていた。避ける暇もなくブレードで機体が真っ二つにされ爆散する。あまりにもあっけない幕引きだ。

「歯車は動きだしたか・・・」

マヤの呟いた言葉の後ろには焦げた大地と爆発したACの残骸が残るのみだった。

## PHASE 07 「過去の記憶 二人のリリス」

廃棄された地下施設を占拠していた武装集団を全て掃討し終わり、地上へと続く道をゆっくりと歩いている一機のAC。ベースカラーは白でカラーリングされているが右腕だけが青にカラーリングされていた。

上へと昇るに連れて空気が悪くなっていくのをレイヴンは感じていた。それは今までの経験で培われてきた本能的な勘が何かを告げている。

施設の出入り口が見えてきた時に、通信が入った。

「この世界の秩序はレイヴンズネストによって護られていると前に話したな」

聞き覚えのある声だった。外に出ると一機のACが待ち構えている。

「その秩序を破壊するイレギュラーなんだよ」

イレギュラー？ 誰が？

「やり過ぎたんだよお前は！！」

僕がイレギュラー？

気がつくと目の前には一機の大破したACが立っていた。機体中から火花が散り、もはや爆発寸前だ。

「企業も俺達も、所詮ただの駒でしかない」

それが最後の言葉だったACは粉々に爆発し通信が途絶える。

「っ！！」

身体を勢いよく起こしたフェイスは辺りを見回す。天井が白く壁も白い。それに消毒液の臭いがする部屋はよく知っている場所の物だった。

「病院・・・？」

額に手を置くと汗でびしょびしょに濡れていた。まるで悪夢を見た後のように。

悪夢。先ほどまで見ていた夢は悪夢だったのだろうか。それにして今感じている懐かしいと思える気持ちは何なのだろう。

「俺は・・・あのACを知っている？」

そんなはずがない。あのACも操縦者の言葉も全ては夢の中の出来事であって実在してはいないのだから。

なのに、それなのにこの言い難い不安と懐かしい気持ちは何なのだろう。

身体を寝かして天井を見つめながら思う。答えはすぐ近くにあった。だが、その答えにフェイスは気づく事がなかった。

ベットから起き出してカーテンを少し押し付け窓の外を眺めていると、病室のドアが開くような音がして、後ろを振り返る。

そこにはリリとジドとセアーヌが立っていた。三人とも驚いたような表情を作ったあと、それぞれ違う表情になる。

リリは涙目になりながらフェイスに抱きつき、ジドはやれやれと言つように肩をすくめ、セアーヌは溜息を吐いたものの顔は微笑んでいた。

一通りの感動が過ぎ去り、フェイスは三人からあの日の戦闘から今に至るまでの経緯を話してくれた。それによるとあの日アークの回収部隊によって回収され、病院へと搬送されたらしい。

何故アークの回収部隊があの場合に来たのかというフェイスの疑問にはリリが答える。

「元タイリスは、他の依頼主によってあの場所でフェイスと戦って欲しいと依頼されていたようです。その後二機が戦闘不能になったのを見て一人のレイヴンが現れました。このレイヴンがフェイスに依頼を出したのですが、実はその依頼は真っ赤な嘘で二人のレイヴンに互いに戦わせ、機体が損傷した所を襲うといった手口で他にも数人がやられたようです。それを見かねたアークが一計を投じたらしいです」

「ってことはアイリスはアークの依頼を受けて行動していたって訳か」「そうなりますね」

ロードガーディアンのことについて聞くと、ガレージに運ばれ完全に修復したようだ。とは言っても吹き飛ばされた腕や武装は普通のシヨップに売っている物を購入し装着させている。

なんだかどん市販パーツで構成されたACになっていくような気がする。フェイスがそれについて唸っていると、ジドが病室を出る時に思い出し笑いのようなものをする。

「なんだよ？」

「いやいや。君が帰ってきた時には面白い物が見れるなどおもつてな」

「はあ？」

こつちの話。こつちの話。とジドは言い残すと病室を出て行く。フェイスの頭の上に「？」が浮かび、黙々と考えを張り巡らせていた。

それから三日が経過しフェイスは無事に退院する事ができた。日時にするとほんの一週間くらいしか時間を空けていないはずのガレージ兼マイホームがとつともなく懐かしい存在に思える。

玄関を開けて家に入るとまず出迎えてくれたのが、

「お、退院できたの？ 良かったね」

フェイスの情報屋であるライン。それに、

「退院おめつとさん」

ジドが雇っている情報屋のエド。そして、

「予定より遅かったじゃないか。退院記念パーティの料理はもう出ているぞ」

そして、イリスがエプロンを着たまま料理を運ぶ為にキッチンから出てきながら言った。その姿を見た瞬間にフェイスの思考は停止し、遠い宇宙に思いを馳せた。それを一般的には現実逃避という。

この当時の事を情報屋であったラインとエドはこつ語っている。

あれほど間抜けな顔はかつて見た事がなかったね。例えるならモンブランケーキを食べたらキムチとワサビと唐辛子と塩の味が口の中に広がったみたいなきな。と証言してる。

「何だ聞いてなかったのか？ 私もこの家に厄介になることに決めたよ。これからよろしく頼む」

「い……」

少しの溜めを作ってフェイスが迎撃ミサイルみたいな勢いで叫ぶ。「いやだああああ！！ どうしてこんな同年代の凶暴凶悪毒舌な人と一緒に暮らさなきゃいけないんだ！？ 可愛くないし！ いや顔は可愛いけど、とにかく言動とか何から何まで可愛くないし！！」

「お前は私が傷つかない人間だとも思っているのか？ それとその手の言動はコメディ物でしょ」

取り乱しながらイリスとやりとりをしているフェイスを後ろで見ていたジドは爆笑していた。それはもう顎が外れるんじゃないかと思えるくらい爆笑していた。

「もう、フェイス。いつまでも駄々こねないの。もう決まったんだし」

「で、でもさ。イリスとは敵同士……」

「それは依頼によってでしょ？ これからはそうならなければいいんだし。それにイリスって料理凄く上手だし、強いんだよ」

リリのその言動はもろ「あの人が私の憧れの人の」的なニュアンスが含まれていた。それを聞いたフェイスはよろよろとふらつきながら一縷の希望を乗せてセアーヌを見る。

「もう決定事項です。観念してくださいフェイス」

死刑判決を言い渡された。この家における地位と権力争いはセアーヌが一番の権力を持ちその次にリリ。そして男三人衆は全て同列というか虐げられていた。

「で、結局こうなるわけね」

ソファで寝ているリリとセアーヌ。そしてその周りには男三人衆の屍が累々と積み重ねられている。いつか見た光景だ。と考えると窓の外から声が聞こえてくる。

「自分の機体はもう見たのか？」

また素足で窓から外へ出ながらいう。

「見たよ。なんかどんだん市販パーツのACになっていく」

「それが普通だ」

言われてみればそうだったなとフェイスが言ったただけで後は沈黙が続く。どうやらイリスと二人でいると沈黙になってしまいうんだなとフェイスは思った。

「そっだ」

「ん？」

今回の沈黙を破ったのはフェイスだ。イリスに言いたいことがあるのを思い出した。

「リリーがすっかりなついてた、あいつは会って間もない人にはなつかないんだけどな。やっぱり分かるのかな、自分と同じだって」

「同じ？」

「あいつの境遇は俺やイリスとよく似ているから。でも俺はリリーにレイヴンとなってほしくはない。あいつがレイヴンになりたいと言い出したら、君が止めてくれないか？」

「何故そこまでリリスのことを気に留めるんだ？」

また少しだけ沈黙が続いたが、フェイスは意を決して話します。

「昔。一人の妹が居た。名前は”リリス” 成長していれば今の”あいつ”と同じ年頃だ。それに”リリス”とあいつはよく似ている」

「すまない、知らないことを聞いてしまった」

「いや、いいんだ。最後まで聞いてくれ」

戦争なんて本当は存在しない。ニュースで流れている映像も別の世界から流れ込んでいる物なんだ。そう思っていた俺は本当に子供だった。どんな事にも誰にでも言えることかもしれないことだと思っただけ。実際に自分の目の前で起こってみて初めて気がつくんだ。

戦争なんて本当は存在しない。そう思っていた馬鹿で子供だった自分が愚かだという事に。俺も思い知らされた二機の”ネクスト”の存在によって。

あの日も普通にいつも通りに目が覚めて、朝ごはんを食べて妹と友達と一緒に学校に登校した。

学校でも変わったことなんか無かった。退屈な授業。友達達とくだらない話をする休み時間。毎日の繰り返しだった。

放課後になって、いつも通りに友達と妹と帰宅した。いつもなら三人で寄り道をして帰るのだけど、妹は真っ直ぐ家に帰った。まあこれも三日に一回はあるから別にいつも通りだった。

そして街外れにある小高い丘に登って、街全体を見渡していた時に異変は始まったんだ。

最初に聞こえたのは呼吸音みたいな音だった。金属が呼吸をしているような音だった。それが何なのか考える暇も無かった。俺の頭上を一機の機体が飛んで行った。その機体が起こした風圧と衝撃で立っていることさえも出来ないんじゃないかと思った。

そしてもう一機の機体が飛来し、戦闘が始まった。地獄の始まりだったんだ。

二機の”ネクスト”が放つ流れ弾によって街が破壊されていった。それだけじゃない、機体のブーストの風圧。OBの衝撃波、着地によっても街が破壊されていく。

その様子をただ見ているだけだった。そして、正気に戻って初めて思ったよ。父さん。母さん。そして”リリース”はどうなったのかと。

そう思い気づいたら丘を駆け下っていた。友達と一緒に。

燃え盛る街に戻り、街から逃げていく人たちとは逆に街の中心部に走って行った。そして自分の家の前に立つと絶望に落された。

家が倒壊し、燃えていた。俺は何かを叫んでその燃えている家に入った。友達も俺を止めようと一緒に入ってきたのかは知らないが後ろに居た。

「リリー！！ 父さん！！ 母さん！！」

夢中になって叫ぶと、その声に返ってきた言葉があった。

「お兄ちゃん・・・？ 無事なの？」

「リリー！！」

見るとそこはキッチンに続く通路で、その道を家の瓦礫が塞いでいた。どうにかそれをどかす事は出来ないかと辺りを見回している。

「お兄ちゃん、早く逃げて！！ わたしのはいいから早くここから逃げて！」

「何を、何を言ってるんだよ！？ そんなこと出来るわけ無いだろ！！！」

「全く・・・本当に分からず屋。」ユキ”お兄ちゃんを連れて逃げて！！ 抵抗したらぶん殴ってもいいから！！」

「本当にそれでいいのね？」

瓦礫の向こうから帰ってきた答えは「うん」と言う言葉だった。それを聞くや否や”ユキ”は本当に俺をぶん殴って、無理矢理家の外に連れ出した。

生きてねお兄ちゃん。わたしやお父さんやお母さんの分まで。

「後は友達に引つ張られて街から逃げる途中。流れ弾が近くに着弾し、爆風に吹き飛ばされて海に落ちて・・・そこからは記憶が無い」  
一通り話し終えたフェイスは空を見上げる。

「”ネクスト”とは何だ？」

怪訝そうな表情をフェイスはイリスに向ける。何処かで聞いたような言葉だったが、それが何処で何を意味しているものだったのかフェイスは全く覚えていないからだ。

「なにそれ？」

「お前が自分で言ったのだろう？ 二機の”ネクスト”と」

「いや、言っていない。ACと言ったはずだが。聞き違いじゃないのか？」

「何処をどう聞き間違えればそうなる？」

「さあ？」

じとつとした目でイリスが睨んでくる。フェイスは愛想笑いを浮かべながらベンチから腰を浮かし走って逃げ出した。

イリスは素早く腰のガンホルスターから銃を取り出すとフェイスに向かって構える。

「えっ！？ うそ？」

「心配するな死にはしない。エアガンだ」

「いやいやいや！ マジで撃つの！？ ねえ撃つの！？」

パン。という乾いた音が響いたとほぼ同時にフェイスの身体が前に少し飛ぶ。

「あうちー！！」

## PHASE 08 「蜘蛛の糸」

背中がまだひりひりと痛んでいる。一応シップは貼ったものの痛みが引く気配は無い。

「まさか人に向かって撃つなんてな・・・」

イリスを見ながら言う。

「お前が逃げるからだ」

人に向かって撃つてはいけませんとは教わらなかったのかね。トリストをかじりながら親の顔が見てみたいとフェイスは思う。

「フェイスが何か変な事をしたんでしよう」

リリスがオレンジジュースを自分のコップに注ぎながら言う。

「何もしていない・・・って何で俺をそんな軽蔑した目で見るんだよ!？」

目の前に席に着いたりリスの視線は明らかに冷ややかな物だった。気づけばその隣にいるセアーも同じような視線をフェイスに向けていた。

フェイスは絶句する。このままでは女性陣三人による恐怖政治が執り行われてしまう。なんとかして防がねば。

「まあフェイスも男だからな。昨日の夜は早速夜のいとな・・・ぶっけっ!？」

言葉の途中でフェイスがジドの椅子の足を蹴り上げ後ろに傾いた所にイリスが投げたピコピコハンマーが直撃し、そのまま椅子ごと後ろに倒れ後頭部をぶつけ痛そうに悶絶している。

そんなこんなで朝食を食べ終えたフェイスはリビングに自分の居場所が無いと感じ、ガレージに籠り機体のチェックを行っていた。

前の戦闘でインブレイカーによって右肩装備の”特殊弾倉ミサイル”が破壊されたので代わりにリーダーが装備されていた。

元々ミサイルを一つ外してリーダーを付けようと思っていたので、丁度良い機会だったともいえる。

「機体のチェックですか？ 不備は見当たりませんか？」

フェイス専属の整備士がいかにも不満そうな顔をしている。どうやら自分の仕事が疑われているようであり、あまり良い気分ではないらしい。

「うん。機体は万全だね。でも右肩装備を変えただろ？ バランスを少し見ておきたくてね」

「ああ。それですか」

整備士は自分の携帯端末を操作しながらフェイスに説明を始める。「重量が軽くなった分だけ機動性が向上しています。今までブースター起動時の最高速度が250kmだったのに対し295まで向上しました。それとレーダーを付けたことによつてECM対策も今までよりは向上し、よほどのジャミングでなければ問題ありません」

「ありがとうございます。よく分かったよ」  
端末を閉じながら整備士はついでといった口調でナインブレイカーを見ながら言う。

「ECMで困るのはあの機体じゃないですかね？ レーダーも装備していないし」

その一言がフェイスには何処か引つかかる。いつもなら自分が担当するAC以外には興味も示さなはずなのに。だからなのか自然とフェイスの口が開く。

「珍しいね？ ユウヒさんが自分の担当じゃないACの事を言うなんて。ナインブレイカーのほうを整備してみたい？」

「まさか！！ 冗談は止めてくださいよ！！ 私はただ・・・」

そんなに力一杯全力否定しなくてもいいのにな。自分の考えていた事が外れて少し落ち込んでいるフェイスに向かってユウヒは身を乗り出してくる。

ガレージ内が暑いのか作業着の胸元をはだけさせていたので、自然とそこに視線が行ってしまう。見てはいけないと思うほど見てしまうのだ。

「私はただ、今度あの機体と戦う事があるならばジャミングを使う

べきだといいたいです。そうすれば絶対に勝てます」

その後もナインブレイカーのバランスの悪さや欠点についてあれこれユウヒは説明してくれていたが、当のフェイス本人にはその言葉は届いてはいなかった。ただ時々「うん」とか「そう」とか曖昧な返事をするだけだ。

ようやくユウヒが離れてフェイスが開放感に安堵していると、

「それと」

ユウヒが再接近し、またもやフェイスは目のやり場に困ってしまふ。

「私は何があってもフェイスさんの味方ですから」

「へっ？」

あまりにも情けない声を出す、ユウヒは赤い顔をしてそそくさと下へ降りていってしまふ。その顔は何処か赤みが差していたような気がした。

「？」

何時までもユウヒが歩いていった方をフェイスがぼーと見つめていると、

「フェイス！」

下の方からジドの声が聞こえてくる。

「何だ？」

「そこに居たのか。依頼だよ依頼」

「分かった」

フェイスはコクピットを降りると、鉄格子に手を賭けてそのまま飛び越え、下の階に着地する。

毎度の事だがジドは半ば呆れていた。

「よくあそこから落ちて怪我しないな」

「ん〜。身体能力の差じゃない？」

ガレージを出てリビングに行く、とリリスがパソコンを操作していた。フェイスが入ってくるのを見ると、画面を向けてくる。

その画面を見ると何か建造物の立体映像が映し出されていた。

「旧キサラギ派の管轄区域であった廃棄施設を調査してもらいたい。実は以前に他のレイヴンにもこの任務を依頼したのだが、消息を絶つてしまった。あの廃棄施設で何が起きているのか私達にも分からない状況だ。レイヴンどうかこの依頼を受けて欲しい」

音声付の依頼文が流れ、その場にいた全員がその声を聞いていた。聞き終わると、フェイスは大きな溜息をつく。

「で？ 誰がこの依頼を受けるの？」

「三人だ」

「久しぶりの仲間と一緒に依頼か。面白くなりそうだぜ」

「え・・・マジで？」

頼りなく言うフェイスの顔には行きたくないと言われていたが、そんなフェイスをイリスははずると引っ張っていきACに搭乗させた。

そんな訳でロードガーディアン、ナインブレイカー、アブソリュートゼロの三機のACは廃棄された研究施設の一階にある大きな部屋にいた。

その部屋の構造は何処かアリーナを思わせる作りになっていた。

何故か部屋を中心の天井だけに半球体の様なものが下に出ていたが、

「今の所何も無しか」

「ああ。それにしても本当に何かいるのか？ レーダーに何の反応ないぞ？」

「いや、そうでもないぞフェイス」

アブソリュートゼロのレーダーにははっきりとこの施設に巣食う敵の正体が映し出されていた。

「恐らく生体兵器だな。俺の機体には生体兵器センサーがついてるから分かる」

「ああ。そういや、キサラギ派つてのは生体兵器を研究してたんだっけか。まずいな数が多いと弾薬が持つかどうか」

「ふむ・・・よしここから先はお前達二人で行け」

少しの沈黙の後。

「え・・マジで？」

「私はこうなる事を最初から予想しておいて、長期戦にも耐えられる様に補給車両を三台牽引してきた。ここを拠点にして私は補給車両の護衛に回る」

「なるほど。さすがでつせ姉御」

「でもさ、補給車両の護衛なら俺が・・・」

「食い下がろうとするフェイスだが、イリスに”カラサワMK2”を向けられ泣く泣くロードガーディアンを進め、ゲートを開け先に進む。」

生体兵器に出くわすこともなく先に進んでいくと、またもや大きな部屋に出る、先ほどの大部屋と作りはほぼ一緒みたいだ。その部屋には左右と前にゲートがあるが、前方のゲートは動作しなかった。「うし。ここは二手に別れるか。お前右な」

「えっ!？」

「じゃあ幸運を祈る」

「ちよつとおおお!？」

叫びが虚しくこえました。フェイスは機体を旋回させて自分が進むべきゲートを見る。そのゲートは地獄の入り口かとも思えるくらいだ。つまりフェイスは、

「虫嫌いですものね。フェイス」

そう。虫が苦手なのだ。小さな蜘蛛を見るだけでも絶叫してしまうのに、どうしてACの足元くらいもある巨大な虫を退治しなくてはならないのか。レイヴンとは害虫駆除の便利屋かと叫びたい。

『情けないね』

「ん？ リリー。何か言った？」

「？ いえ私は別に何も？」

気のせいかな。確かに変な声が聞こえたような気がしたが。きつとそれもこれも、こんな変なでじめじめして（偏見）根暗で（言い掛かり）やられキャラのアジトのような場所のせいだとフェイスは決めつける。

「まいいか。リリー。そつちでゲート開けてくれないか、何か飛び出してきそうぞ」

「了解しました」

スロットルをフルに入れ、ブースターのペダルを力の限り踏み抜くと同時にリリスが研究所のコンピューターにアクセスしてゲートを開ける。ベストタイミングだ。

ロードガーディアンが加速していく。ゲートをくぐり通路を進み、角を曲がった所で、

「ああもう！！ お約束だな！ どちきしょう！！」

生体兵器がウエルカムとでもいったげに待ち受けていた。

ブースターを解除しようともせずに、突っ込みながら右腕装備のリニアレールキャノンを構え、手前にいる生体兵器から順に撃ち抜いていく。

壁や床に生体兵器の体液がぶちまけられるがそんな物はお構いなしに前へと進んでいく。

機体に取り付こうと飛びついてきた生体兵器をブレードで一刀両断にし、奥に居る生体兵器を正確に撃ち抜く。

「生体兵器だが、蜘蛛だかアリだかゴキリだかUMAだか知らないけどなあ！！ 人間様なめんじゃねえええええ！！」

「・・・キャラ変わってますよ」

入り組んだ通路を右に曲がり、左に曲がり、フェイスは勘だけでロードガーディアンを進めていくと曲がり角を曲がった先にゲートがあった。

滅茶苦茶に進んだので、最初の地点に戻ってきた可能性も否めないが、フェイスはゲート脇にある端末をACのマニピレーターで操作するとゲートが開いていく。どうやらまた大きな部屋の様だ。

部屋に踏み込むと、反対側のゲートが開きアブソリュートゼロが入ってくる。

「おっ。無事だったか？ どうだ何か居たか？」

「生体兵器が少し。数で押されればきついが、まさかレイヴンがあ

れに負けたのかな？」

「信じ難いな」

ジドが先に進もうと、残っているゲートまでアブソリュートゼロを歩かせる。フェイスもその後が続こうと思ったが、モニターの片隅に何かが見えたため機体をそちらに向かせる。

「なんだ？」

その何かをモニターの正面に捉え、確認してみるとそれはACだった。大破して鉄くずになってはいるが、それは紛れも無くACのコアと脚部だ。

その残骸の近くまで行き損傷度合いを確認するが、恐らくこれでは搭乗者は生きては居ないだろう。

「おかしいなゲートが動作しないぞ？ 壊れてるのか？」

「どうやら、その様ですね。今回の依頼は調査ですから、この辺で帰還してもいいのでは？」

セアーヌの言葉に同意したジドがアブソリュートゼロを旋回させていると。

ゴウン。ゴウン。ゴウン。

何か機械が作動するような音が聞こえてくる。レーダーを確認すると、真上に反応があった。

「フェイス！！ 上だ！！ 上を見る！！」

上を見た。そこにはイリスが待機している部屋にもあった半球体の物体が少しずつ開いていくのが見える。あそこから砲台でも出てくるのだろうか。

何が出てくるのか分からぬままフェイスとジドは開いていくのを見守っていた。

半球体が開ききると、そこから出てきたのは砲台ではなく。ぽっかりと開いた穴だった。安堵の息をフェイスが漏らした瞬間。その穴から”それ”が出てきた。

「おいおいおい・・・なんだよあれ！！」

その意見には大いに同意したい。フェイスとジドの目の前に出て

きた”それ”は明らかに人間の想像の領域を超えていた。

何本もの足。ACの十倍は大きいんじゃないかと思わせる図体。そして天井も苦にならず移動できる”それ”は糸を吐けば思いつきり蜘蛛だった。

「何！？ 何あれ！？ スパイダー気取り！？」

「気取りっていうかスパイダーだろう！？」

ロードガーディアンはブースターを起動し。右に跳躍しリニアレールキャノンを構える。

「どうしてレイヴンが害虫駆除退治しなくちゃならないんだよ！？」  
立て続けにトリガーを引き十発ほど連射する。その全ての弾は一直線にスパイダーに向かっていき、全弾命中する。しかしスパイダーは全くこたえた様子が無く。その目にロードガーディアンを映し出す。

ターゲットロックオン。

きゅぴんと擬音が出そうな勢いでスパイダーの赤い目が光ったかと思うと、口から、身体中から糸を<sup>レーザー</sup>吐き出す。

「なんで蜘蛛がレーザーで攻撃して来るんだよ！？ 体内機関どうなってるの！？」

「俺が知るか！！ ってゆうか何でお前が攻撃したのに俺まで攻撃されてんの！？」

「知るかあ！！ 無差別攻撃だろ、どう見ても！！」

迫り来るレーザーの嵐を潜り抜け、隙を見てリニアレールキャノンを撃つが、致命的なダメージを与えられない。もっと火力の高い武器でないとしたらだ。

「ああ！！ もうやるしかねえ！！」

障害物の陰に隠れレーザーから身を隠していたアブソリユートゼ口がレーザーの嵐の前へと躍り出る。

全てのパーツを重装備で固め。重武装を施したアブソリユートゼ口は圧倒的な火力と防御力を誇っている。

レーザーが各部位を掠めるのも直撃するのも気にせず、スパイ

ダーに向かって両腕のグレネード。両肩のレーザーキャノン砲を正射する。

更にコア固定装備の自律兵器を射出するイクシードオービット（EO）を起動する。

数あるコアの中で全てがOBを有しているのかと言えば、そうではない。コアによってはOB、EO、そしてそのどちらも無しというのがある。どちらもないコアのことを一般的に標準装備ともいう。標準装備のコアのメリットは他のコアよりもミサイルの迎撃性能が秀でている事だろう。

またEOにも種類がある。まずアブソリュートゼロが装備しているコアのEOはエネルギーキャノンを発射する高出力型である。他にも実弾グレネード。エネルギーマシンガン。実弾マシンガンなどが存在する。

アブソリュートゼロの全ての火力がスパイダーに集中し、着弾したグレネードとレーザーキャノンの爆煙で視界が全く無くなる。その爆煙を突っ切ってロードガーディアンがスパイダーに接近する。

左腕のブレードを展開し、スパイダーを真ん中から両断する。スパイダーの身体は左右半分ずつに、地面へと落下する。

「終わった・・・か」

「弾薬ほとんど使ったな」

安堵する二人にそれぞれのオペレーターから通信が入る。

「上から熱源が接近しています！ 気をつけ下さい」

見ると、あの穴からたつたいま両断したスパイダーと全く同じ奴が出現する。しかも今度は大勢の子分まで従えている。

「え・・・マジで？」

「フェイス！ ここは一旦撤退するしかないぞ。もう弾薬が底を尽きる寸前だ！」

ブースターを起動し後ろに後退しながらジドが言う。

「分かっている」

「やられるなよ！..！」

ロードガーディアンはOBを起動し、迫り来る小型生体兵器の群れの中を突っ切る。

その間にアブソリュートゼロは反対側のゲートを開け、通路を移動していた。

OBを起動したまま、開いたゲートに飛び込む。すぐに通路を左に移動し始めるが、先ほどからコックピット内に警報が鳴り響き続けている。

エネルギー残量が少なく、OBの使用による熱量によってオーバーヒート寸前だ。それでもブースターを使用し、後ろに後退しながら追って来る生体兵器を撃ち抜き続ける。まるで、糸に絡められた獲物が脱出しようとはがくように。

## PHASE 09 「貧乏くじ」

生体兵器の追撃を何とか振り切り、ナインブレイカーが待機している部屋まで戻って来たロードガーディアンとアブソリユートゼロの二機は補給車両から弾薬を取り出し補給をしている。その近くではナインブレイカーが周辺を警戒しながら待機していた。

「生体兵器の数はどれくらいだ？」  
「かなり多い」

弾薬の補給を終えたロードガーディアンが立ち上がる。アブソリユートゼロはまだ補給が完了していないようで、左の脚部を曲げ膝をついたままだ。

「だけだよ、厄介なのはスパイダーだろ？」

「スパイダー？ 何だそれは？」

ナインブレイカーが振り返りアブソリユートゼロの方を向く。

ジドは先程遭遇した常識を外れた生体兵器の事を熱く語った。だが、生体兵器というものが存在している時点で充分常識を外れている事をまだ彼は気づいていない。

「だから、蜘蛛だよ蜘蛛。ACの十倍はある蜘蛛」

やがて蜘蛛蜘蛛うるさいジドの事が目障りになったイリスは何の躊躇いもなくナインブレイカーの右腕に装備している”カラサワMK2”をアブソリユートゼロに向け引き金を引く。

銃口から青白い光が放たれ、それはアブソリユートゼロの頭部の右側を掠めて通過し、後ろの壁に着弾する。

「一度だけで理解は出来る」

「……はい」

「今回の依頼は施設の実態調査だけで生体兵器の破壊は含まれていない。引き上げるか」

二人のやりとりを黙って見ていたフェイスが口を開く。その意見にフェイスとジドも同意し、補給車両を一台ずつ牽引しようとした

時だった。

ゴウン。ゴウン。ゴウン。

何かが作動する機械音が聞こえてきた。その音を聞いたフェイスとジドは咄嗟に上を見た。天井にはあの部屋と全く同じ半球体があった。

「まずい、あそこからパイダーが出てくるぞ！」

「こつちからも客人のようだぞ」

「囲まれたか」

左右の壁の通気孔から小型の生体兵器が次々に侵入してくる。前方には大型生体兵器。左右には小型生体兵器。そして後ろには出口が無い。完全に退路を断たれてしまっていた。

「フェイス。ジド。分かっているな？　しくじるなよ」

「ああ」

「合点承知のすけさんだぜ！　姉御」

真中の位置のロードガーディアンが機体を沈め跳躍する。機体が浮くと同時にブースターから光が放たれ、機体が加速していき、スパイダーが出てくるであろう穴へと一直線に向かっていく。

左側に立っていたニンブレイカーは、生体兵器に機体を向けると右肩装備のグレネードを放つと同時に左肩装備のミサイルをパージ（捨てる）しブースターを起動し一気に生体兵器群に接近するとブレードを展開し薙ぎ払う。

生体兵器群の反撃を受ける前に機体を後ろに跳躍させ、カラサワMK2を撃つとまた接近しブレードを展開する。高い機動性を生かしたかく乱戦法である。

長期戦になる事を想定した上でブレードをメインに使う事により弾薬の節約になる。だが、操縦者であるイリスには負担が大きい。前へ後ろへの縦のGが絶え間なく襲い掛かり、一瞬でも動きを止めれば生体兵器の的となる為精神的にも身体的にも厳しい戦法だ。

右側に位置しているアブソリュートゼロは左の脚部を曲げ方膝を床につけ、グレネードを発射する姿勢をとる。

目の前に広がる生体兵器群の真中を狙い両肩装備の大口径グレネードランチャーを撃ち続ける。一発直撃するたびに数十体の生体兵器が消滅するが、それでも生体兵器は歩みを止めない。

人とは違い、命欲しさに臆する事が無い。旧キサラギ派が生体兵器を研究していたのはそこに着目していたからだろう。

天井の穴から大型生体兵器、スパイダーが姿を現すと同時に間近まで接近していたロードガーディアンが左腕装備のブレードを展開し、両断しようとして振り下ろす。

ブレードの刃がスパイダーの表面を切り裂くが、浅かった為スパイダーは絶命する事無く、攻撃の目標を目の前にACに定める。

レーザーの一斉正射を落下しながら機体のバランスを右に左に傾け、ブースターを使う事無く回避する。

みるみる地面が近づき着地する寸前でブースターを起動し落ちる速度を減速させ、着地と同時に素早く移動する。

生体センサーを搭載していない為、ロックは出来ないがロードガーディアンは右腕のリニアレールキャノンをスパイダーのレーザー射出口を狙いを定め連射する。

狙って撃った攻撃のほとんどが射出口に直撃しなかったが、一発だけ直撃する。丁度レーザーを発射する寸前だったため、行き場を失ったエネルギーが暴発し予想以上のダメージを与える。

攻撃の手が緩まり、動きが鈍ったのを見てロードガーディアンはもう一度跳躍する。ブースターを起動し一気に接近し、ブレードを展開しスパイダーの頭に狙いをつける。

「もらったあああ!!」

ブレードが横一線の軌道を描き、スパイダーの頭部が上下二つに割れる。

スパイダーの足が力なく天井を離れ、そのまま落下していく。

「退路は確保した! 撤退するぞ!」

「了解だ」

「遅せぞ、フェイス」

ナインブレイカーはOBを起動し、ロードガーディアンを真横を通過する。ロードガーディアンはアブソリュートゼロが撤退できるように、その場に留まり援護する。

アブソリュートゼロがゲートを通り、通路に出るのを見るとOBを起動し閉じていくゲートの間を滑り込む様に通過する。

「リリース！ ゲートロックだ封鎖しろ！」

「了解しました」

三機はゲートがロックされた事を確認し、ゆっくりと出口に向かって歩き出す。

「やれやれだ。補給車両が無駄になるとは」

「死ぬよりはマシだろ」

来た時と同じく、出口までの道には生体兵器はいないものだと思いい、フェイスは安堵していた。

「まずい。リリース！ 急げ！！」

いきなり叫んだジドにフェイスは驚いた。それと同時に緊張の糸再び張り巡らせる。

「後ろからあいつらが追って来ている！」

「え…マジで？」

機体を振り向かせると、確かに生体兵器が続々と行進して来ていた。通路の道をそして天井と左右の壁に張り付きながら迫ってくる。

「リリース！ 何処か近くに外に通じている出口は無いのか！？」

「待つてください…次の右側の通路に入ってください」

ブースターを起動し通路を駆け抜け、リリースの指示通りに通路を進んで行く。最後尾のロードガーディアンはリニアールキャノンで生体兵器を迎撃している。

「その通路の進んだ先…登り傾斜になっています。そこが出口です  
！！」

指示通りに進み、登り傾斜になっている通路に出る。その通路の先には通気用の大きなファンがあり、その向こう側から光が差し込んでいた。

ナインブレイカーはOBを起動し通路を進みながら、グレネードでファンを吹き飛ばし外へと脱出する。

遅れてアブソリユートゼロが、その通路をブースターを起動し飛ぶように一気に駆け上がる。

その間、ロードガーディアンが生体兵器を迎撃しようと生体兵器にリニアレルキヤノンを向けトリガーを引くが、スクリーンの右下に弾が尽きた事を知らせるメッセージが流れる。

「っちー!!」

舌打ちをしながら、コアのハンガーユニットから小型サブマシンガンを取り出し、左腕に持ち、連射する。

「フェイス!!!」

声と同時に機体を振り向かせ、OBを起動する。

Gが襲い掛かると同時に機体が爆発的に加速するが、すぐにエネルギーの警告音が聞こえてくる。このままではエネルギーの残量が持たない。

「エネルギーが…尽きる」

『ここで諦めるのかい?』

「えっ…?」

先程と同じ声が聞こえる。

『リミッター解除。起動方法は』

聞こえ始める声に従い、コンソールを操作するとスクリーン上にリミッター解除の文字が表記され、エネルギー残量が最大まで回復する。

射出口のように斜めになっている出口から外に飛び出すと目の前にはナインブレイカーが見えた。肩のグレネードを向けている。

とっさにエクステンションを起動し、横に移動する。

「撃て!!! イリス!!!」

グレネードの光は吸い込まれるように、出てきた穴に入り込み、爆発する。続けて二発。三発とグレネードを撃ち込む。残っていた十発の残弾を全て使い切り、ナインブレイカーが地面へと着地する。

穴からは黙々と黒煙が昇ってくるだけで、生体兵器が出現する気配は無い。

「ここでの事はアークにも報告した方が良さそうだな」

「ああ。周辺に生体兵器が流出しているかもしれん」

「そうだな」

同意したフェイスをよそにイリスとジドは同時に似た様な笑みを浮かべる。互いに顔は見えてないのに。タイミングまで本当に一緒だった。

「よし。ではフェイスがアークへの報告書書く様に」

ジドとイリスの声が見事に重なる。

「え…マジで？」

「さて、この後一杯やりましょうよ姉御」

「それもいいな」

「ちよつとおおお！！ 意気投合していないで俺一人にやらす気が！？」

「お。迎えの輸送機が来たぞ」

「無視するなあああ！！」

「さて。帰るか」

あくまでも無視を続けるジドとイリスのせいでロードガーディアンの操縦桿には水が滴ったのは言うまでもない。

「貧乏くじですね」

「つてか俺最近酷い目に遭いすぎだろう！？」

「…かもしれませぬ」

さつき確かに聞こえた謎の事の事をすっかり忘れていたフェイスだが、近い将来にその声の真実を知る事になる。それはフェイスにとってとても残酷で絶望と呼ぶにふさわしいものだ。だが、それはまだ少しだけ先の話である。

## PHASE 10 「反逆の罭」

ある晴れた日の昼下がり。リリスはテレビのチャンネルを適当に回しており、ジドは漫画本を読んでいる。セアー又は家計簿を書いており、イリスは料理の本を読んでいた。そしてフェイスはソファに寝転がっていた。

閑散とした住宅街は不気味なほど静かだった。開け放した窓からは小鳥の鳴き声が聞こえてくる。

特にやる事も無く暇を持て余しているだけなのに、フェイスにはこの時間がとても心地よく思えた。出来るのならこれがずっとずっと続いて欲しいと思っていた。

何故そんな事を考えたのかはフェイス自身も分からない。もしかしたら幼い時に家族を亡くした彼が何処かで一家団欒を望んでいたのかもしれない。

「ニュースでいつか」

チャンネルを回していたリリスがニュース番組でチャンネルを固定する。ニュースでは企業の事や今の情勢などを語っていた。

「次は、国家特殊部隊『フライトナース』についての特集です」

アナウンサーの言葉にイリスとジド。フェイスが一齐にテレビに視線を向ける。「フライトナース」と聞けばレイヴンとして見逃せない話題だった。

「フライトナース」とは国家直属の特殊部隊のことである。近年レイヴンとなる者が増加した為、レイヴンが反旗を翻す事に危機を覚えた国家はもしそうなった時の対策として特殊部隊「フライトナース」を設立した。

ブラウン管にはフライトナースの隊長を務めるレオス・クラインが映っていた。三十台後半から四十台前半の中年である。元レイヴンとの噂もあるがそれが真実かは分からない。

今日はフライトナース設立を記念して国家のお偉いさんが参列す

るセレモニーが開催される。勿論そのセレモニーの警備はフライトナースが担当する。自分達の記念パーティーなのに自分達で仕事をしなければならぬとは悲惨だとフェイスは思う。

「どう思う？」

「フライトナースの事か？ 別に企業を護る訳じゃないんだ。俺達にはあまり関係ないんじゃないか？」

レイヴンの依頼は企業によってもたらされる。国家、または政府にから依頼がもたらされることは一部の例外を除いてありえない事だ。すなわちフライトナースは敵にも味方にもならない。

難しい顔をして何か考え事をしているイリスにフェイスが声を掛ける。

「どうした？ 何か気になる事でも？」

「いや……少し嫌な予感がしてな」

「そっか」

フェイスはその時は大して気にも留めなかった。

夕方にフライトナースから依頼が送られて来たのでその内容を確認してみると、

『全てのレイヴンに告ぐ。我々が結成されたからには今までの様に好きにはやらせない。もはや貴様達の存在など無意味な事を今日のセレモニーに警備として参列することで思い知るがいい』

との事だった。かなり挑発的な内容だ。その口上にフェイスが内心気を悪くしていると、明らかに腹を立てた様子のイリスが依頼を受けると言い出した。

最近めっきり依頼が来なくなっていたので、丁度良い肩慣らしが程度にはなるだろうと思いついフェイスも受ける事にする。

「じゃ、俺も受けるかな。こんな事を言いやがって、フライトナースがどれほどのものか確かめてやるうじゃないか」

ガレージにある三機のACを輸送トラックに積み込み、輸送機が離着陸できる場所に向かう。

レイヴンが依頼を受けてから目的の場所に行く時はほとんど輸送

機を使う。そのためACの輸送を専門に仕事をする業者が数多く存在する。ジェット機が離着陸できる滑走路に加え、レイヴンのオペレーターが待機する管制室も備えている。分かりやすくいえば空港のようなものだ。

セレモニー会場へと到着した時には既に日は落ちて暗くなっていたが、いくつもの照明やスポットライトが辺りを照らしていた。セレモニー会場となっている場所は国家の管理区域である軍の基地内だった。つい先程からお偉いさんなどを乗せたジェット機が忙しく着陸して来る。

フライトナースがレイヴンに対して挑発じみた依頼を送ったのにも関わらず、数多くのレイヴンが会場に参列していた。その中にはナインボールの姿もある。

誰もが見たかったのだ。絶対的な力の象徴”レイヴンとAC”に対してあそこまで大口を叩けるフライトナースの力を。

「十三、十四…ざつと二十か」  
「レイヴンがここまで集まるとは、フライトナースは人気者の様なな」

「ああ。だが、心配事もある。フライトナースが現れた時に、馬鹿なレイヴンが戦いを仕掛けなければいいが……もしそうになったら、最悪な結果が生まれる」

何時に無く消極的なイリスの言葉にフェイスは、昼間にイリスが言っていた事を思い出す。フライトナースのニュースを見ていた時も難しい顔をして何か考えていた。もしイリスの予感が当たるとしたら、何かが起こる。

「ジド。イリス。ACのメインシステム。戦闘モードを起動……しよつか」

「この警備で何かが起こるって言うのか？」  
「いや、ここはフェイスの言う通りにしよう。何か嫌な空気を感じる」

コクピット内のコンソールを操作しメインシステムの戦闘モード

を起動させる。この時、集まった二十五人のレイヴンの中で、反射的または直感で何かを感じ戦闘モードを起動させた者はわずか七人であった。

「リリー。どうしてフライトナースは俺達レイヴンにあんな依頼を送り付けて来たんだろうな」

「……………大……………ジャ……………」

「リリー？ どうした!？」

「……………つう……………し……………」

通信が途絶え後はノイズしか入って来ない。どうやらジャミングが周辺一帯に発生しているようだ。

時計の針がゆっくりとセレモニー開始の時間を告げると同時に、一機のACが炎上した。当然の様に周辺は混乱状態に陥る。炎上したACの後ろには一機のACの姿があり、右腕に装備されているレーザーライフルの銃身から煙が出ている。

「テロリストか!？ いや……………あれは、馬鹿な!？」

ゆっくりとレーザーライフルを降ろしたACは全身を青にカラーリングされていた。肩のエンブレムにはフラストナースの紋章が刻まれていた。

その機体こそは国家直属特殊部隊フライトナースの隊長機。レオスIIクラインの搭乗機である。

「お集まりの方々。そしてレイヴンの諸君。私はフラストナース総帥。レオスIIクラインだ。今この時より、我等こそが力の象徴！我等こそが新たな国家を作る事ができるのだ！ 私は真の平和をもたらす事ができる国家を……………ここに建国することを宣言する!!」

クラインの言葉が終わると同時に、特殊部隊フライトナースのACが次々とセレモニー会場に降下して来る。瞬く間に戦場と化した会場ではあちらこちらで戦火を交えている。

突然の奇襲により、反撃をする間もなく撃破されていくレイヴン。圧倒的に不利な状況の中でニンボールを筆頭に数機のACが反撃を開始する。

「フライトナース……クラインは反旗を翻した。これよりレイヴンである我々は依頼を遂行する！ 各レイヴンへ自分の持ち場を死守しろ！！」

ナインボールと数人のレイヴンを除きなおも混乱し続けるレイヴン達だが一人のレイヴンの言葉によって平静さを取り戻し、指示通りに迫り来るフライトナースのACを迎撃し始める。

上空に大型の輸送機が飛来するとその輸送機からはレイヴンズアークに所属しているレイヴンが続々と降下して来る。レイヴンはその姿を見て、援軍が来たと士気を高める。更に若くしてレイヴンズアークの主宰を務めるジャック・Oがそのカリスマ性を発揮し指揮官となり、レイヴンをまとめる。

自らもフォックスアイに搭乗し前線で戦いながら的確に指示を出す。フォックスアイの背中を護るは側近のマーヤが駆るミッシングだ。

圧倒的劣勢の状況から少しずつ押し返してはいるが、物量的に負けているレイヴン側は苦しい戦闘が続いていた。

そんな状況の中一人の若きレイヴンがフラストナースのAC三機に囲まれてしまう。

「……ここまで、ですか」

左腕を失ったAC。ヘブンズレイを駆るジャウザーは絶望的状況の前に死を覚悟する。しかし、彼はただで死ぬつもりは無かった。少しでも多くの敵戦力を道ずれにしようと武器を構える。

「貴方方の行動は世界に混乱を生むだけです。そんなこと絶対に実現させません！！」

その時フライトナースの三機のACの中で真中のACの脚部が吹き飛び、そのまま前倒しになる。残りの二機のACが振り返ろうと旋回しようとした時、一機のACが倒れたACの上に着地し、左腕に装備しているロケットと右腕に装備しているマシンガンでそれぞれ左右二機のACのコアを撃ち抜く。

「ふん……小僧が、ろくに生きてもないくせに命を粗末にするな」

ジャウザーにはそのACに見覚えがあった。レイヴンスアークに所属するレイヴンでアークの中でも最古参レイヴンである鳥大老というレイヴンが駆るACだ。

「助けていただき、ありがとうございます」

「礼なら、この状況を生き延びてからいうんだな……行くぞ！」

「了解です」

リーダーに新たな敵影を確認し、二機はブースターを起動させ迎撃に向かう。

一方で、フライトナース隊長機とはロードガーディアンが戦っていた。どちらかが劣勢かは明らかに見て取れる。ロードガーディアンは既に右腕をなくしているのにも関わらず、フライトナース隊長機には何の損傷も見られない。

「どうした？ その程度かレイヴン」

「くっ！！」

油断していた訳ではない。ましてやクラインを並みのレイヴンと同じかそれに劣ると過小評価していた訳でもない。クラインは恐らく自分よりも強いと感じていた。その実力差が想像と現実では大きくかけ離れていただけである。

「その機体に描かれているエンブレムを見た時は胆を冷やしたがなあいつがここに居る筈もないか」

「何を言っている？」

「お前に話す必要などない。ここで死ね」

左腕のブレードを展開しながらブースターを起動し、急接近する敵ACとブレードの光。フェイスは気づいた。もう回避は間に合わないという事と間もなくあのブレードが自分の機体を切り裂く事を自分の妹だった”リリス”が脳裏をよぎった瞬間。フェイスの視界は暗闇に包まれた。

「あれは……あの馬鹿！！」

フライトナースのACのコアをブレードで切り裂き撃破したインブレイカーの視線の先には、ロードガーディアンとクラインのA

Cの姿があった。

右腕を失くし戦闘能力を大幅に削られたロードガーディアンに止めを差そうとクラインの機体がブレードを展開しながら接近する様をみたイリスはとっさにOBを起動する。

「やらせるか！」

カラサワMK2をクラインの機体に狙いを定め、トリガーを引く瞬間。コクピットに警報が鳴り響いた。右側からミサイルが接近している。イリスは舌打ちをしながら機体を右に向かせ、エクステンションの迎撃ミサイルを起動させる。

ミサイルを放ったACを無視してロードガーディアン元へと急ぐイリスだが、その進路を一機のACが塞ぐ。

「クラインの元には行かせない」

「邪魔をするな！！ だけ！！」

接近しブレードでコアを狙うが、急ぎすぎているため狙いも間合も全てにおいて甘くなってしまう簡単に回避され、逆に左腕をバズーカで打ち抜かれる。

「くっ！！」

「弱者に気をとられていると、強者たる者も命を落す」

「知ったような口を！！」

ナインブレイカーが左肩に装備しているミサイルから六発のミサイルが発射される。敵のACはそれを見るとすぐに回避行動に移る。ACの操縦技術が一流である事には間違いがない。だが、イリスはそれを逆手に取った。

敵がミサイルを回避しようとして距離を離すと同時に振り返り、OBを起動する。フライトナーズの操縦者はその意図に気づいた時には遅かった。ナインブレイカーは爆発的に加速し一直線にクラインの元へと向かう。

「それが目的か！！ ボルス隊！ ナインブレイカーを絶対にクラインの元へと向かわせるな！！ クラインの指示通りロードガーディアンとの戦いを邪魔させるな！！」

ナインブレイカーの行く手を更に二機のACが塞ぐ。目の前から右のACがやや先に接近してきている。ナインブレイカーは右手のACにカラサワを放ち、頭部を破損させ。もう一撃で脚部を破壊する。

目の前に倒れこんだACを跳躍して避け、やや後ろにいた左手のACに至近距離から六発のミサイルを浴びせ撃破する。

「雑兵が邪魔をするな!!」

「さすがはナインブレイカーか……だが、ここからは一步も通さん！」

一機の重装型ACが目の前に仁王立ちしていた。イリスは倒しても倒しても次から次へと援軍に現れる敵の事に苛立ちを覚えていた。「死にたくなかったらどけ!!!」

「射程内……入った。カイオスフィールド発動！」

「なっ……!!? 機体が……!!」

カイオスフィールドとは周辺に散布したナノマシンによってレーザー等のエネルギー系武装の集束率を低下させる他、ミサイルやロケットといった推進機構を持った実体弾にも干渉し、弾道を逸らせる事で無効化させるフィールドを発生する。なおフィールド内に入ったACの駆動系にも作用し全く動作しなくなる。

ただし展開時間は短い上、内部からの攻撃にも効果が及ぶ為、装置の起動中は自機も攻撃が不可能となる。

一対一の戦いでは使いどころが無いがここは戦場である。

「今だ!! ナインブレイカーを討て！」

「はっ! 了解しました！」

集まってきた五機のACのパイロットが答える。イリスは操縦桿を強く叩き目の前のACを見据える。

「……貴様らなどに！」

自分達もカイオスフィールドの効果範囲に入らないように一定の距離を保ち、マシンガンやライフルを構える。

「……ここまでか、すまないイリス。フェイスを護るところかわた

しも……」

大きな爆発音と共に囲んでいた一機のACが吹き飛んだ。二機のACが乱入しナインブレイカーを狙っていたACに戦いを挑んでいく。

「ふん……小僧のくせに命を粗末にするな」

「間に合っつてなによりです」

ヘブンズレイとエイミンググホークが瞬く間に敵を撃破していき、カイオスフィールドの発生源でもある機体も撃破される。

「機体に損傷が見られる様ですね。援軍にきたレイヴンズアークが会場中央にAC用パーツなども積んである大型輸送機を着陸させました。そこに行き補給と修理をしましょう」

「……わたしの事はいい、それよりも一人のレイヴンを救ってくれ。今はクラインと交戦している」

「小娘か……クラインと交戦しているACとはさっきの奴の事か」

「どういう事だ！？まさか見殺しにしたのか!？」

勢い込むイリスにジャウザーが落ち着くように促す。だが、イリスは少しも落ちつく様子もなく今にもエイミンググホークに襲い掛かりそうな雰囲気だ。

「クラインと交戦しているACを援護しようとしたのですが、断られたのです。自分の事よりも周りの負傷している人たちを助けてくれと。それに、右腕を失くしていた様ですが、クラインに負けてはいませんでしたよ。いえそれよりも押していました。残っている武器がブレードだけのACなのにです」

「何だと……?」

ブースターを起動させ接近する。ブレードを展開しコアを両断し

ようと狙いをつけ斬りつける。クラインにはブレードがコアを切り裂く様が見えた瞬間。目の前のロードガーディアンが左腕のブレードを展開しそれを受け止める。

「なっ……馬鹿な、あの状態から間に合うはずが……」

ロードガーディアンのコクピットでは一人のレイヴンがコンソールをせわしく操作していた。その速さは既に何をすればいいのか全てを把握しているようだった。

「損傷度中。破損部分右腕へのエネルギー供給を全てカット。左腕部の反応速度をノーマルからクイックに。ジェネレーター出力最大解放。肩装備及びエクステンション。パージ終了」

ブースターから閃光が放たれると同時にロードガーディアンが信じられない速さでクラインの機体へと接近する。それはまるで脚部の甲の部分にローラーでもあるのかと思わせるくらいの速度だった。とっさに機体を後ろへと後退させようとするクラインだが、ロードガーディアンの接近を許してしまい、肩装備のミサイルを吹き飛ばされる。

何故肩装備を狙ったのだろうか、やろうと思えばコアを両断する事だって出来た筈なのだが、クラインが疑問に思っていると、新しく二機のACが接近してきていた。確認するとフライトナースのACでは無い。

「大丈夫ですか？」

「僕は大丈夫です。それよりも周辺にいる負傷している人たちを助けて上げて下さい」

「小僧のくせに言うな」

援護に来たジャウザーと鳥大老は機体を返し、ブーストを噴かしその場を離れる。

「さっきの挨拶代わりと違い、今度は本気でいきます」

問い返す暇もなくロードガーディアンが仕掛けてくる。信じられない速さで接近し、ブレードで腕を斬りつけ、反撃する間もなく移動を開始し背面に回りこまれ、ミサイルを斬り落される。

ブーストを噴かしその場から離れようと上空へと飛び、ロードガーディアンを確認しようとするが、その機影を確認できない。その瞬間警報が鳴り響きモニターに上の矢印が表示される。

とっさに上を見ようとしたが、それは違う事を一瞬の直感で……いや、経験で判断した。次の攻撃は上からではない恐らく。

「真横か」

クラインの言った通りに上空から落下してきたロードガーディアンがブレードを展開し左から襲ってくる。

この戦術をクラインは過去に味わった事がある。真上に気を取られ、そこを見ると広がっているのはただの空だけである。

モニターの死角を利用した攻撃だ。

ロードガーディアンのブレードを左腕のブレードで受け止め、右腕のレーザーライフルを構えコアに向かって撃つ。普通なら回避できるはずも無いがロードガーディアンはレーザーを回避し、地上へ落ちていく。

二機のACは互いに向かい合い着地する。

「あの戦術。やはりそうか」

「久しぶりだね。まさか生きているとは思わなかったよ」

「お互い様だろう。まさかここにお前が居るとは思わなかった」

「少し理由があつてね。さて、そろそろ終わりにしようか僕にはまだあまり時間が無いんだ」

「もとよりここで全てを決するつもりは無い。国家に対する宣言とレイヴンの数を少しでも減らしておきたかっただけだ。だが、予想以上の収穫があつた。どうだ私と一緒に来てくれないか？ お前と私ならば出来ない事など無い、一緒に理想の国家を創ろう」

そしてクラインはその名を口にする。過去に自分の友と認めたり人のレイヴンの名前を長い時を超えてもう一度確かめるように言う。

「我が友。」アルフォード「ルランスロット」

「君は……まだ僕の事を友だと思っていたのかい？」

「当然だ」

「そうかなら」

アルフォードと呼ばれた青年は笑いながら答える。

「僕は友として君をここで止める」

僕の意識が少しでも”表層”に出ている内にね。アルフォードと呼ばれた青年は誰に言うともなしに呟く。

「あの時”の再現か……だが、ここで私は死ぬわけにはいかない。移動空中要塞” STAL” に来るがいい、そこが決戦の場所だ。また会おう我が友」

クラインはフライトナース全軍に撤退命令を出し、自分も撤退する。ロードガーディアンはそれを追おうとはしなかった。

「大丈夫ですか？ フライトナースは撤退しました。一度ジャックの下へと戻って来てください。話があるそうです」

「……」

返答が無いのを不審に思ったマヤはミッシングをロードガーディアンの目の前に移動し、外部操作でコクピットのハッチを開けるとミッシングのハッチも開け、ロードガーディアンのコクピットに乗り移る。

シートに座っているがぐったりしている青年の脈をとり、生きている事を確認する。恐らく気絶しただけだろう。

ロードガーディアンを操縦してジャックの所まで行こうと思い、青年をシートの後ろへと移動移そうとする。その時偶然にその顔を見た。

「……アル……フォード……」

## PHASE10「反逆の罫」(後書き)

この話で一応少しの区切りがついたような気がしますが。あくまで僕がそう思っているだけです。

ようやく物語も中盤辺りです。この話までお読み下さった皆様。本当にありがとうございます。できましたら感想や評価なども頂きたいと思います。

感想などをもらった日など全裸で踊りたくなります。捕まりそうですが、それくらいの心境が。とどうでもいい事はどうでもいいのですね。では、これからもどうかお付き合いください。

## PHASE 11「ガーディアンイグナイト」

移動空中要塞” STAL” 国家がその威信と誇りを賭けて建造した力の象徴である。その火力は一晩でこの国を焼け野原に出来る程だ。クラインはフライトナースの反乱と共にこの空中要塞をも強奪していた。

既にフライトナースに対抗する為に国家が全てのレイヴンに依頼を出し、フライトナースに対する危機感を覚えていたほぼ全てのレイヴンがその依頼を受け、急造ではあるが国家側の連合軍が結成される。

連合軍の総司令官は国家の軍人達を差し置いてレイヴンであるジャック・Oが務める事になった。これはレイヴンの中でもジャックを押し声が圧倒的に多かった事と若くしてレイヴンズアークを統べるその手腕を認められた結果だ。

ジャックの指揮の下連合軍は即座に国家の軍隊が防衛線を張り、フライトナース侵攻に備えていた。

レイヴンは全ての元凶であるクラインを倒す為に” STAL” に直接乗り込む雷撃作戦を実行する事になっている。

レイヴンズアークでは明日作戦を行うに当たっての、前夜祭が行われている。広いパーティ会場には様々な料理とワインやお酒が並んでいた。バイキング形式である。

普段は顔を合わせる事が少ないレイヴン同士だが、今は共通の敵を持つている味方だからか皆で意気投合し騒いでいる。まるで明日戦いに赴くようには思えない和やかな雰囲気だった。だが、それもやはり明日が決戦の日だからであろう。今までにないほどの大規模な戦争。企業間の戦争とは訳が違う。誰もが分かっている。明日、生き残れる確率が低い事を。

だからこそ、今は笑い合っている。今を楽しんでいる。

「どうしたんですか？ 浮かない顔ですね」

窓際で一人窓の外を眺めていたイリスは聞こえてきた声に振り返ろうとはしなかった。

「不安なんですか？」

「馬鹿を言うな。こういう雰囲気は苦手なだけだ」

隣に立ち、窓の外を眺める若きレイヴン。ジャウザーを横目にイリスはただ外の闇を見ていた。

不意にグラスを目の前に出され、イリスはジャウザーを見る。ジャウザーの右手には左手で差し出しているグラスと同じ物を持っている。

「飲み物です」

「見れば分かる」

差し出されたグラスを受け取ると、ジャウザーは会場の中央に身体を向ける。ここからの位置だとこの部屋の全てが見渡せ、誰が何処で何をしているのかが見える。

「皆さん楽しそうですね」

「明日は今までにない程の規模の戦争だ。生き残れる確率が低い事を誰もが知っているんだろう。だからこそ今だけを楽しめば良い」

「そう言っている割には、貴女は楽しそうにしていますね？」

グラスの飲み物を飲むとイリスは小さく笑う。

「楽しみ方は人それぞれだ。あれを見る」

イリスの視線を辿って見ると、一人の男の元へと行き当たった。

その男は他のレイヴン数人と結託し、誰かのオペレーターやレイヴンズアークの女性スタッフと見るや否や猪のような突進振りでナンパしていた。その結果はことごとく撃沈だが、それでも挫ける事無くひたすらにナンパを続けている。

その様子を見ていたイリスは含み笑いをしていた。一方のジャウザーは引きつった笑顔をしている。

「お知り合いですか？」

「面白い奴らだろう、お前も参加してきたらどうだ」

「いえ……」

「そうか。わたしはあいつらに助言でもしてやってくる」

ナンパ撃沈している人たちの所に行こうと歩き出したイリスをジャウザーが呼び止める。後ろを振り向くと、ジャウザーは真剣な表情をしていた。

「変わりましたね」

「ん？」

「あなたがですよ」

ジャウザーの言おうとしていることがよく分からない。第一ジャウザーとは以前に会った事など無い。会ったのはつい最近だし、昔は、昔は周りには誰もいなかった。

「僕は以前会った事がありますよ。覚えていないと思いますが、過去に一緒に戦った事もあります。その時のあなたは今の様では無かった。もっと他人を拒絶していました。いえ、自分をも含む全てのレイヴンを憎んでいました」

その言葉で先の戦いでフライトナーズ側のパイロットに言われた言葉を思い出す。『弱者に気をとられてしまうと、強者たる者も命を落す』確かそう言っていたはずだ。確かに昔の自分ならそのような事など言われるはずもなかった。だが、実際には一人のレイヴンを救おうとして冷静な判断を下せず、A Cの左腕を吹き飛ばされた。それが弱さか。

「だからわたしは弱くなったのだな」

「いえ……そういう意味では」

一匹狼のレイヴンと言えど、いや、本当は一匹狼を気取っていただけだ。仲間が欲しいと、友が欲しいと思っていた。だが、過去の事から失うのが怖くて他社と交わる事が出来なかったただけだ。

それが一人のレイヴンと知り合ってからと言うものの、一人だった自分の周りには大切な人たちが集まってきた。それからだ、変わってしまったのは。

「変わる事で弱くなるのならば、わたしは今のままの弱さが良い」  
それだけを言い残し立ち去って行ったイリスの背中を見つめなが

ら、ジャウザーはその言葉の意味を考えていた。

「ふん……小娘かと思ったが中々言いおるな」

声に驚いて横を見るとそこには初老の紳士風の男が立っていた。

今の口振りや雰囲気から察するとエイミングホークを駆る鳥大老である。

「何時から居たのですか？」

「さてな。小僧に気づかれるほどワシは甘くない」

「そうですか」

「死ぬなよ。小僧。ワシの人生の半分もまだ生きちゃいないんだからな」

「ええ。貴方も鳥大老」

そうして夜は更けていった。

一人のレイヴンが暗い闇の中を歩いていた。それはまさに漆黒と呼ぶにふさわしい目の前すら見えない闇の中だ。

そんな深い闇の中でも前に歩いて行けるのは何故だろう。少しだけ疑問に思ったがすぐにそんなことどうでもよくなる。

時間の感覚すらなく。疲労すらない。どれくらい歩いたのだろう。ぼんやりと思っていると少し前に一人の少年が現れる。その少年はこつちを見ていてずっと待っていたとでもいいたげな表情をしている。

右も左も後ろも暗闇に閉ざされている中で、その少年の周りだけはスポットライトに当てられている様に明るかった。

『もうすぐ全てを審判の日が訪れます。その日に全てを……』  
少年の言葉だけが不気味なほど響き渡ってくる。問い返す暇も無く、視界が歪み始める。何処かに落ちていくような、回っているような。自分が立っているのか座っているのかも分からなくない。やがて、目の前に光が広がり。気がつけば白い天井を見つめていた。

壁も天井も白で統一され消毒液の臭いのするここは少し前にもお世話になった場所のベットのようだ。

まだ目覚めきっていないが、それでも身体を起こすと目の前に一人の女性の姿があった。手をフェイスの腹部の上に乗せうつ伏せで誰かが寝ている。とつさにリリースかセアーヌのことかとフェイスは考えたが、二人とも顔が髪で隠れるほど長くはない。

誰だ分からないでいると、その女性が目を覚まし、すごい勢いで身体を起こす。

「あつ……マーマヤ……さん？」

前に一度だけ会った事がある。

確かジャックの側近だった人だが、どうしてこんな所で寝ていたのだろうか。当のマーマヤ本人はまるで幽霊でも目になっているかのようにならぬ顔をしている。何処か具合でも悪いのだろうか。

マーマヤは何かを躊躇っているかのようになり、言葉を紡ぎ出せないでいたが決意の色が瞳に現れ、口を開く。

「聞きたい事が……あります」

「はい」

「アルフォード＝ル＝ランズロット……この名前に聞き覚えはありますか？」

途切れ途切れだが、はっきりと何かを強く吐き出すように言う。人の名前のような音が、フェイスには心当たりが無かった。

その事を告げると、マーマヤは悲しそうな表情を浮かべると深くお辞儀をし足早に病室を後にした。

マーマヤが出て行った後。耳鳴りがするほど静寂の中で今更なが

らにどうしてこんな場所にいるのだろうか」と記憶を思い返していた。確かフライトナースが反乱を起こして、クラインと戦って。

そこまで思い出してフェイスは自分の身体を見る。何処か怪我をしていないか確認してから呆然とする。

どうして生きているのだろうか。目前まで迫ったブレードの光。そこで記憶が途切れている。その後何があったのだろうか。

考えていても埒があかないので、この病院から逃げ出そうと身の回りを調べる。何か私物が無いかと思いつめようとしたが、何も無かった。

その代わりにベットの横の棚の上に、車のキーとその下にメモ用紙があった。

メモ用紙を見るとどうやらこの病院の地下駐車場の何処に止めてある車のカギなのが書かれていた。それとも一つ。明日。いやもう今日の作戦内容についてだ。

その二つだけを持ち、誰にも見つからない様に病院を抜け出し、車に乗り込みカギを差し込みエンジンをかけ、駐車場から発進する。行く場所は決まっていた。自分のガレージである。

ロードガーディアンはどうなっているか。ましてや何処にあるか分からない以上。自分のガレージに行ってみるのが最善だと思ったからである。

他に車が全然通っていない夜の街を規定速度を大幅にオーバーしながら爆走する。信号が赤だろうと止まらない。曲がり角だろうと減速しないという心構えで車を走らせていく。

一時間ほど法律御免で爆走し、見覚えのある家が見えてくる。空の向こう側が微かに白ずんでいる。もうすぐ夜明けだろう。

車から降りて、家に入ろうとするがカギが掛かっている。仕方ないのでガレージへの道に回りこんだ時に初めてガレージ内から明かりが漏れていることに気がついた。

誰かいるのか。

人が出入りする扉を開けると、ハンガーに収められた一機のAC

が視界に飛び込んで来る。紫と白を基調にカラーリングされた機体。一見して見覚えの無いかと思っただが、よう見ているとそれはロードガーディアンだった。

頭部や腕部。脚部、コアに至るまで改修を施され色まで変わってしまったているが、右肩に描かれている盾のエンブレムや装備している武装はロードガーディアンの面影がある。

不意にACの目が光、頭部がフェイスを見下ろす。一瞬身構えるフェイスだが、コクピットのハッチが開き中から人が出てくる。

「やっぱり来ましたね。来ると思っていましたよ」

「ユウヒさん……」

「機体の修理及びパーツを最新鋭に替えとききました。スペック上ではかなり向上しているはずですし」

ユウヒはロードガーディアンを振り返り、苦笑する。

「まあ、色はあたし好みの色に変えちゃいましたが」

もう一度フェイスを見て、今度は苦笑ではなく笑顔になる。

「上がって来て下さい。作業もあと数十分で終了する予定です」

言われたとおりに上に上がり、ACと対面する。こうして見渡すともう別のACに様に思えてしまう。武装を確認すると右腕のリニアレールキャノン。左腕のレーザーブレード「残光」。左肩装備のミサイルは前と変わらないが、右肩に装備されていたレーザーが外され、その代わりにACを両断出来る程の長さを持った大剣が装備されている。

「あの武器は？」

「あれはあたしと仲間数人がかりで理論から現実の物へと作り上げた自慢作で、ブレードの実剣版です。見た目程重量はありませんし、レーザーだって弾き返せる剛性を誇ります。MTはおるかACでさえバターの様に簡単に両断できるはずですよ」

全く新しい武器カテゴリだった。既存の武器には実剣は存在していない。世界で唯一である。

「それとこの時間だと、輸送機が使えないと思いますので、推進用

ブースターを取り付けてあります。それによって長距離の移動が可能になります」

ACの背面に付けられたブースターを指しながら言う。これだけの作業をたった一人で全て行ったと言うのだろうか。

「さてと、作業も終了したようですし行って下さい。今日の作戦が成功するって信じてますよ」

「ありがとう、他に何て言ったらいいか……」

「ACの整備。それがあたしの仕事です。あ、ボーナスは弾んでもらいますよ？　ここ三日間貫徹で作業したのでその手当て込みです」

「それは勿論」

「じゃあ、報酬を払う為に生きて帰って来て下さい。待っています」  
首を縦に振って肯定し、ACの乗り込む。メインシステムは既に起動してあるので機体の状態をチェックしながらコンソールを操作する。背面ブースターの接続も何も問題が見当たらない。全ての兵装にも問題なし。

ユウヒがガレージを開き、ゆっくりと歩いて外に出る。道路にまで歩いて行き、目指すべき方向に機体に向け、背面ブースターを最大出力で起動させる。

空気を取り込む音が聞こえ、次の瞬間には凄まじいGが襲い掛かってくる。OBのGなんかは比較にならないほどの強いGだった。速度を見てみるとマツハ1を超えている。通常のOBでもそこまでの速度は叩き出せない。

これほどの速度ならばレイヴンズアークに到達するまでの時間はそんなに掛からないだろう。

進行方向の逆側からは朝日が昇り前を明るく照らし始める。

ユウヒは一瞬の内に見えなくなったロードガーディアンが飛び去った方角をじつと見ていたが、やがてガレージ内に戻り、AC通行用のハッチを閉め、自分はガレージの真中に寝転がる。

つい最近までは三機のACが収納されていた場所に今は一機のA

「Cも無い。別段珍しい事ではないが、ユウヒはなんとも言いがたい不安に駆られていた。もう二度とあのACとフェイスが戻って来ない気がした。」

「ガーディアンイグナイト騎士の守護者。彼を護って」

## PHASE 12 「陥落の守護者」

朝日が昇り始めの朝早くから、レイヴンズアーク周辺のACガレージでは人が忙しく走り回っていた。作戦行動に向けて自分のACに異常が無いか誰もが皆入念にチェックしている。

イリスとジドも例外ではなくそれぞれ自分達のACのチェックを行っていた。リリスとセアーヌの二人はオペレーターとして必要な書類に目を通していた。

それは空中移動要塞”STAL”の内部構造やコンピュータへのハッキング方法。ハッキングした後のゲートの開閉コードなどが記されている。更に敵戦力の把握や作戦完了時の内部からの退却経路などを含めどんなアクシデントにも対応できるようにいくつものパターンを頭の中でシミュレートしている。

そんな最中突如として響いた爆音に誰もが皆、手を止めてその音の方向を見つめる。

そこには一機のACの姿があった。背中に見慣れない装備を付け、一直線にこちらに向かってきている。レイヴンの中にはフライトナイズの奇襲攻撃かと勘違いした者もいたが、見慣れないACは簡易ガレージの一角に着地すると中から人が降りてくる。

その姿は奇異としか言いようが無かった。ACに搭乗する際のパイロットスーツを着ていないどころか、どこかの病院の服を着ているのだから。

その事に本人は気づいていないのか、突き刺さる視線が何なのか分からずにいた。

「フェイス！」

人ごみの中から一人の少女が飛び出し、そのレイヴンの名前を呼ぶ。フェイスが声が聞こえてきた後ろを振り返るとリリスが飛びついてきていた。

「うわっ！」

それを何とか受け止めると、ジドとリリース。それにセアーヌも人ごみの中から姿を現す。

「良いのか？ 病院抜け出してこんな所に居て」

嫌味っぽい言い方だが、ジドなりにフェイスの事を心配しているのだろう。フェイスはその事を知っているから笑いながら返事をする。

「このACは……？」

セアーヌがガーディアンイグナイトを見上げながら聞いてくる。

セアーヌはその外見とは裏腹にACや機械類にとても詳しい。というか無類の機械オタクでもある。本人に言わせてみれば職業上仕方なくとの事だが確実に楽しんでその知識を詰め込んでいる。

その為見慣れない機械、武器、MT、戦車、戦闘機、生体兵器、

そしてACを見るとその詳細のデータを明らかにしなければ収まりがつかないらしい。

実際ジドの仕事中に現れた新型MTの詳細データを知る為にそのMTを開発した企業のメインコンピュータにハッキングする事に成功したという経緯がある。一歩間違えれば天才ハッカーとなることを本人はまだ気づいていない。

「それはユウヒさんがロードガーディアンをベースに今回の作戦の為に一から組み直してくれた”ガーディアンイグナイト”外見だけじゃなくて内部のパーツもかなり変わっているしスペックも向上している。はいこれ」

「これは……ファイルですね？」

フェイスが一冊の分厚いファイルをセアーヌに手渡す。そのファイルには丸秘・ガーディアンイグナイト。と書かれていた。どうやらユウヒがセアーヌを思って詳細のデータをまとめていたようだ。ちなみにフェイスはこれをコクピット内で発見。

セアーヌとジドがそのファイルに興味津々そうに目を通している傍らでフェイスはリリースを見る。

「いい加減離れろ」

未だに引っ付いて離れないリリスの頭を軽く小突く。リリスは顔を上げて明らかに不機嫌そうにしているが、無視。

「必ず来ると思っていた。身体は大丈夫か？」

「大丈夫だ」

「そうか。なら」

イリスはフェイスを上から下まで見てから、レイヴンズアークの本部を指差す。

「服くらい着替えたらどうだ？」

「へっ？」

言われて初めて自分が病院の服のままにいることに気づいたフェイスは赤面する。

かつこよくACで飛来してかつこよく降りてきたから周りの鋭い視線が突き刺さっているのかと思ってたが、この奇異な服装に目を奪われていたというわけだ。かなり恥ずかしい。

「なんだ気づいて無かったのか？ 馬鹿だな」

とジド。反論する暇も無く、

「気づいてなかったんですか？ 馬鹿ですね」

とセアーヌ。何気に反論する気力が無くなって来る。

「気づいてなかったのか？ 馬鹿」

とイリス。ここまで来ると少しへこみたくなるが、

「気づいて無かったの？ お馬鹿さんだ」

最後にリリスの言葉で止めを指される。

何だろうこれ。何で病院の服装ってだけで馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿。呼ばわりされなくてはいけないのだろうか。何か納得出来ないと思いつつもレイヴンズアーク本部に服を借りに行くフェイスであった。

それから数時間後に集まった全てのレイヴンに対し総司令のジャックが今行こう作戦内容を伝えていた。その中にはフェイスの姿も当然ある。

作戦内容はこうだ。輸送機に三機ずつ搭乗し”STAL”の甲板

上に降下。対空火器及び甲板上に配置されている全ての兵力の破壊が第一の目標である。甲板を制圧完了後にレイヴンズアークの大型輸送艦が甲板に着陸。そこで機体の修理と弾薬の補給を行い、甲板に留まり敵を迎撃するチームと内部に突入しクラインを倒すチームに別れる。

チーム分けはジャックによって言い渡され、有名レイヴン同士は互いに違うチームに別けられ、二つのチームの戦力が同じように調整されている。

ちなみにフェイスは突入班。イリスとジドは待機班だ。

ブリーフィング解散後にフェイスはジャックに呼ばれ、行ってみると作戦時の別行動を頼まれる。

内容は推進用ブースター”フライトユニット”と呼ばれるバックアップを装備しているガーディアンイグナイトが単機で”STAL”に接近。甲板上の対空火器を破壊し、輸送機への危険を減らすと言うものだ。

本隊が到着するまでの陽動とも言つべきであろう。

「危険な役目だが、君の戦果しだいで味方への被害は少なくなる」

「勿論。強制ではありませんので、断る事も出来ます」

ジャックの側近であるマーヤが補足する。その言い方や表情から何処か断って欲しいと思っっているのが読み取れる。

マーヤとはそれほど面識がある訳でもないが、今朝の事で何か引っかかっているのだろうか。

少し疑問を抱きながらもフェイスは考える。自分がこの役目を引き受ければ確かに味方への被害は少なくなるし危険性も減る。対空火器で輸送機が落されたらそれに搭乗しているACとレイヴンも終わりだ。

「分かりました。その役目引き受けます」

「そうか……君の活躍を期待する」

一礼してからフェイスは本部を後にする。フェイスが出て行ったのを見届けたジャックは呟く。

「これで見れるか。彼の”ドミナント”としての力が」

本部を後にしたフェイスは簡易ガレージに戻り、皆にジャックに頼まれた作戦を伝える。

「それで、引き受けたのか？」

「ああ」

フェイスの返事にジドは少しだけ意外そうな表情をするが、すぐに思い直す。

「気を付けるよ」

「分かっている。リリー」

フェイスが振り向くと既にリリスは全ての準備を整えていた。

「オペレーション頼むな」

「了解」

互いに頷いて、フェイスはガーディアンイグナイトに搭乗する際に、

「撃墜されるなよ！」

聞こえてきたイリスの声に手だけ上げて答える。

コクピットのシートに座りメインシステムを起動させる。ゆっくりと機体に火が入って行くのが分かる。コクピットの電子機器が光始め、スクリーンに外の様子が映し出される。

機体の再チェックを行っているというリリスから通信が入る。

「聞こえますか？ フェイス」

「大丈夫、聞こえるよ」

感度チェックの為の通信を終え、ガーディアンイグナイトを輸送機まで移動させる。STALのレーダーにギリギリ入らない所までは、輸送機で行き。そこでガーディアンイグナイトを射出。撤退する。

作戦行動時間になり、輸送機が滑走路から飛び立ちSTALが現在飛行中の区域に向かう。飛び立ってから三十分が経つ。

「予定よりもSTALの侵攻が早いようで、輸送機で近づけるのはここまでです」

「了解」

リリスの通信後に輸送機のハッチが開き、その向こう側には白い雲が流れていた。まさかACでこの高度を飛ぶ事になるとは思わなかった。

ブーストを噴かし外に飛び出すと同時に背面の”フライトユニット”を起動する。機体の姿勢が安定すると”フライトユニット”のバーニアの出力を最大にする。

爆発的に加速するガーディアンイグナイトの進路の先には巨大な建造物。移動空中要塞STALが見えてくる。

「STALから熱源探知。迎撃ミサイル。それにグレネードです回避してください」

「っち!!! 対応が早い!」

エクステンションの迎撃ミサイルを起動させるが、あまりのミサイルの多さに迎撃ミサイルの残弾数が尽きると同時にエクステンションをパージし機体を軽くする。

迫るグレネードを左に回避し、次のミサイルを右に回避。右に左に空を駆けるその姿はまるでダンスでも踊っているかのようだった。

ガーディアンイグナイトはコアのOBを起動させ更に加速する。その速度の前にはSTALの対空砲火も甲板に配置されているACもなす術が無く対空防衛線を突破される。

「う、うわあああ!!!」

甲板のフライトナーズのACのコアに対AC用実剣「飛翔」が突き刺さり、そのまま惰性で引きづられていき炎上、爆発する。

全てのフライトナーズのACが防衛線を突破してきた正体不明のACをロックし雄たけびと共に一斉に撃ちまくる。

それは対空防衛線を単機で突破し一撃でACを破壊したその戦闘能力を目の当たりにした為に恐怖に吞まれていた。その恐怖を打ち消そうと闇雲に撃ちまくるが、ちゃんと狙っていない攻撃が当たるはずも無く、大剣「飛翔」を振りかざすガーディアンイグナイトの前に一撃で破壊されていく。

戦闘が始まってから数分。ガーディアンイグナイトは既に五機のACを破壊している。その戦果に一番驚いているのは他でもないフェイス自身である。

先程の対空砲火を掻い潜った時も感じたが、ミサイルが何処に飛んでくるのか、ACが何処にいるのか、何をするのが手に取る様に分かる。

背後から飛んで来る銃弾を見もしないのに正確に回避出来る。ミサイルでさえも同様だ。

なぜそんな風に分かるのか、それともACの性能自体が向上している為なのか。よく分からなかった。分からないが、今は敵を撃破することだけを考える。

「本隊到着予定時間まで残りわずかです。ACよりも対空火器を優先して破壊してください」

「残存する対空火器の数は？」

「十……十四です。全てを破壊するには一つ辺り一分もありません」「充分だ」

ブースターから赤い閃光が光りホバーリングしながら機体を移動させる。目の前のマシンガンを乱射しているACの頭部を「飛翔」で貫き、脚部を右腕に持っているリアールキャノンで破壊する。左から接近するミサイルを全て左腕に持っている「飛翔」で防ぐ。防御が手薄になった対空ミサイルを「飛翔」で両断し、即座に次の目標に向かって移動を開始する。

正面に立ち塞がるAC二機に向かって、ミサイルを放つ。二機の内一機が上空から迫る垂直ミサイルを回避できずに爆発。もう一機はコアを脚部の接合部分を「飛翔」で破壊され戦闘不能に陥る。

「トイっ！！くそっ！！なんだよ、なんなんだよあいつは！？」

目の前で知り合いがミサイルの直撃を受けて爆発する様を見たフライトナースのパイロットが一機で乗り込んできて、既に味方のAC十機を破壊している正体不明機に全兵装を向ける。

他のACが放ったミサイルによって空中に逃れた敵ACに照準をロックしマシンガンを撃ちまくる。

距離が近い為マシンガンを回避する事が出来ないと悟ったのか敵ACはOBを使い一気に間合いを詰め、剣で攻撃してくると思っただので一足早くブーストを使い後ろに後退した。が、敵ACは一瞬の内に目の前に迫る。

「あつ……ああ!？」

そのままコアをリニアレールキャノンで貫かれACは爆発する。フライトナース側はガーディアンイグナイトを止める最後の手段としてカイオスフィールド搭載機を前線へと投入させる。ガーディアンイグナイトが他の友軍ACと交戦している間にカイオスフィールドを発生させ行動不能に陥らせようとする。

カイオスフィールドの射程内に入り、フィールドを発生させる。気づかれる事なく無事にフィールドが発生され、搭乗していたパイロットは安堵した。これであの敵を撃破することが出来る。そう思った瞬間コアに実剣が突き刺さる。

「があああ!？」

無残な叫びと共にACが爆発し、ガーディアンイグナイトは「飛翔」を拾い上げ、悠然と残存する対空火器に突撃する。

連合軍の本隊が到着した頃には、STALに配置されていたフライトナースの部隊はほぼ壊滅状態だった。その為妨害もなく、全てのレイヴンが無事STALに降り立つ事が出来たのだが、誰もが皆固唾を飲んだ。

甲板に転がっているいくつもの鉄くずはACや対空火器。それに戦車や戦闘機だったものだろう。先に突入した一機だけで甲板を制圧したというのか。

ACの攻撃を受けた事やオイルを大量に浴びた事により、持っている大剣の刀身は黒く染まり、装甲の白く染色されている部分までも黒に染まっている。

紫と黒のカラーリングのその機体に誰もが皆恐怖を覚えた。

何故、これほどまでの力を持っているレイヴンが今までほぼ無名に等しかったのか、誰もが疑問に思った。

「ドミナント」の力。これ程までとは」

自らもACに搭乗し前線に出撃しているジャックも甲板に広がる惨状を目の当たりにしていた。

少し前まではこれほどの力を持つてはいなかった。いや、隠していたというのか。もしそうならば一体何の為に。

様々な疑問を抱きながら、補給をしているガーディアンイグナイトに視線を向ける。

既に内部には突入班のレイヴンが突入し、フライトナース部隊と交戦中だ。フェイスも補給を終えたらすぐに向かうつもりでいた。

「お疲れ様です。この後は他の人に任せても良いのでは？」

「いや、僕も内部に突入するよ。今度こそ……」

補給が完了するとガーディアンイグナイトのブースターを起動させ、内部に突入する。

ガーディアンイグナイトが内部に突入して間もなく、STALLの更の上空の高度に三隻の大型武装戦艦が飛来する。

甲板にいた全てのレイヴンが空を仰ぎ、その戦艦を見る。

ジャックも同様にそれを見るが、彼でもそれが何であるのかはとっさには分からなかった。

突如として戦艦がその武装をSTALL甲板にいるACに向けて一斉に放つ。その砲弾の雨を回避しきれず三機のACが各部位を破損する。

砲弾が止んだと思うと、三隻の戦艦からはACが続々と降下し始める。フライトナースはまだこれほどの戦力を持っていたのか。そう考えたが、ACのカラーリングが統一されていないのと、肩のエンブレムが違っていた。

「何者だ……？」

静かにジャックが口を開く。その問いに対して正体不明軍のリーダーらしき男が答える。

「我々は”アライアンス戦術部隊”」

聞いた事が無い部隊名だった。軍の手の者でもないだろう。

「アライアンス戦術部隊長・エヴァンジュ”行くぞジャック・O”  
エヴァンジュが自らの機体。オラクルを駆り、ジャックに戦いを  
挑むのを合図に”アライアンス戦術部隊”が行動を開始する。」

一方の内部に突入したガーディアンイグナイトは外の状態など知る由もなく、無人MTをリニアレールキャノンで撃ち抜く。

「結構探し回ったが、クラインは何処だ？」

「フェイス。大変です！！」

「どうした？」

「甲板に”アライアンス戦術部隊”を名乗る部隊が現れ、現在こちらの部隊と交戦中です！ 他の突入したレイヴンも甲板の応援に行くそうです」

「分かった」

外の状態を伝えられたリリスによって伝えられたフェイスは機体を振り向かせ、通ってきたゲートを逆に戻ろうとした時、部屋全体に振動が起き、収まったのでゲートを開けると、その向こうは来た場所とは違う場所に繋がっていた。

広い空間に一機のACが佇んでいる。間違いなくクラインの機体だった。

「あの時も……お前は同じ行動を取っていた……イレギュラーか。」

お前の存在は予想の範疇を超えている。だが、全ては理想の為。復活の為。消えるイレギュラー！！」

訳の分からない叫びと共に、クラインは両肩装備のミサイルを放つ。

迫り来るミサイルをOBとフライトユニットのスラスタを同時に起動させ。一瞬の爆発的な加速で回避する。

ミサイルを回避したガーディアンイグナイトに接近し、ブレードを展開し上段から振り下ろす。ガーディアンイグナイトは左腕装備のブレード「残光」でそれを受け止めるが、クラインはそう行動す

る事を分かっていたかのようにOBを起動させる。

コアのブースターが開き閃光が噴出する。どうにか回避しようと思っただがクラインのAC。”ガーディアンブレイカー”に押さえ付けられ身動きが出来ないまま、壁に激突する。

その衝撃でフライトユニットが破損し、衝撃に顔をしかめていたフェイスが急いで前を見る。目の前のガーディアンブレイカーは両肩装備のミサイルを零距离で発射する。

「くろう!!」

右腕が爆風で吹き飛び、頭部も破損した為、ACのコアに取り付けられているサブカメラにモニターが切り替わる。

「くそっ！ フライトユニット破損に加え、右腕破損。ミサイル破損。左腕のレーザーブレードも破損している、武器は『飛翔』のみか」

「遅い！ 遅いぞ!! アルフォードおお!!」

叫びと共にガーディアンブレイカーが迫る。左腕のブレードを右からの薙ぎ払い。それを後ろに跳躍し回避すると、更に踏み込んできて左に返すように薙ぎ払う。それを「飛翔」で受け止めると同時に下段からの切り上げでガーディアンブレイカーの左腕を吹き飛ばす。

「あなたの負けだ。レオス!! クライン！」

「……!! くっ。”この時代”でもお前には勝てなかったか。アルフォード」

「アルフォード？ まさかアルフォード!! ル!! ランスロットの事か？」

「そうだ」

「その人の何を知っている？ 知っている事を全て教える。その人の行方を探している人がいるんだ」

少しの間沈黙が訪れる。クラインにしてみれば目の前のレイヴンが何を言っているのか理解できなかったからだ。

「何を……言っている？」

「アルフォードという人のことを教えて欲しいと言っているんだ」  
「……いいだろう。アルフォードⅡルⅡランスロットはこの場にいる」

「まさか、あなたが!？」

「いや。アルフォードは……」

クラインの言葉を遮り一際大きな振動がSTALに起こり始める。どうやら動力炉が損傷し、高度を維持出来ていないらしい。このままでは数十分と持たないだろう。

「レイヴン。この先の通路に行け。そこを通れば一直線で甲板に出られる。早くここから脱出しろ」

「でも……! あなたは!？」

「早く行け!! 私はここに残る。どのみちこの機体はもう動かん」  
出来るのなら助けたかった。せめてフライトユニットさえ破損していなければ、共に脱出することも可能だった。だが、フライトユニットは破損し、ACはもはや動くのがやっとの状態だ。

機体をゲートに向かって歩かせ、ゲートが開くと同時にOBを起動し後ろを振り返らずに、登り斜面を駆け上がる。

甲板に出ると、レイヴンズアークの輸送機が見えた。

「フェイス! こつちだ!」

イリスの声の通信が入り、今一度OBを起動する。

「逃すか!?!」

ガーディアンイグナイトを追って、一機のACがOBを起動させる。そのACは”アライアンス戦術部隊長と名乗ったエヴァンジユの機体。オラクルだ。

損傷が激しい為、オラクルより速度が出せない。逃げ切れないと察したフェイスはOBを解除し、機体を振り向かせる。

接近したオラクルはブレードを展開する。左から右への薙ぎ払いを後ろに跳躍し回避しそのままOBを起動しレイヴンズアークの輸送機に滑り込む。

そうすれば全てがうまくはずだった。

オラクルはブレードを薙ぎ払いではなく、突出型ブレードのように真っ直ぐ突き出す。後ろへと跳躍したガーディアンイグナイトに追いつき、そのブレードがコアを貫通し背面のブースターをも貫通する。

その様子を一部始終見ていたイリスは何かを叫ぶ。

目の前に見えるのはコアをブレードが貫通し、オラクルがブレードを引き抜くと力無く地上へと落下し始めるガーディアンイグナイトの姿だった。

同時刻。ガラガラになったACガレージでうたた寝をしていたユウヒが悪夢にうなされて、起きる。額に手を置くと凄い量の汗だった。

ガレージから出ると、外は雲ひとつ無い晴天だった。だが、その空模様とは裏腹にユウヒの心は雲がかかったみたいにもやもやしている。

レイヴンズアーク本部にいたりリスも、クライン機と交戦した途中から通信が繋がらなくなっていたことに多大な不安を寄せていた。窓の外に広がる雲ひとつ無い晴天が、とても哀しく見えた。

### PHASE 13 「蘇る天使 その1」

暗い闇の中をただ歩いていく。何処に行こうとしているのだろう。何処に行きたいのだろう。どうして歩いているのだろう。何も確かなことなど無いのに。どうして。

時間の感覚すらなく。疲労すらない。どれくらい歩いたのだろう。ぼんやりと思っていると少し前に一人の少年が現れる。その少年はこつちを見ていてずっと待っていたとでもいいたげな表情をしている。

右も左も後ろも暗闇に閉ざされている中で、その少年の周りだけはスポットライトに当てられている様に明るかった。

その光景もその少年もいつか見たような気がする。前にここに来たはずだ。

「やあ、初めまして……ですね？ 僕達がこうして会うのは」

「君は誰だ？」

「僕はアルフォードルランスロット」

聞き覚えのある名前にフェイスは驚きを隠せない。マールヤが探していた、そしてクラインが友だと言っていたのはこの少年のことだったのか。

「ここは……どこだ？ 俺は、死んだのか？」

ここに来る前のことで覚えているのは、ACにコアを貫かれた事だ。幸いにもコクピットは逸れていたがブースターを破壊され、落下していくのを止めることは出来なかった。その後の事は覚えていない。気がついたらここにいた。

「君はまだ死んでいません」

「じゃあ、ここは何なんだ？」

「本当に、ここが何処だ分かりませんか？」

怪訝そうな表情をフェイスはアルフォードに向ける。その表情から読み取ったのか、それ以上は何も言わず右手を空に向かって掲げ

る。

暗闇に光が差し込み、続いて爆音が響き渡る。

「何だ、これは!？」

驚きを隠せないのも無理は無い。一瞬にして戦場の真只中に放り出されているのだから。だが、不思議と恐怖は無かった。

音も聞こえ、目の前ではAC同士の戦闘が行われているのにそこから逃げようとせすにただ傍観している。その戦闘が映像にすぎないことをフェイスは既に感じ取っていた。聞こえるのは音と。見えるのはその光景だけ。風も感じないし爆風に包まれても熱さも痛みも感じない。

場面が切り替わり、今度はACの格納庫の様な場所だった。そこではアルフォードが大勢の仲間に囲まれて笑い合っている。その仲間の一人にマーヤの姿があった。今よりも多少幼いが間違いなくマーヤだ。

次に映し出されたのは、また戦場だった。見た事も無い機体がACを軽々と薙ぎ払っていく。まるで赤子の手を捻る様に、全く戦闘にもなっていないかった。

また場面が切り替わると、そこに一機の見慣れたACが立っていた。

左腕で対AC用実剣「飛翔」を構え、フライトユニットの翼を広げているその姿は紛れも無く「ガーディアンイグナイト」だ。だが、戦っているACのような機体は何なのかは分からない。

ガーディアンイグナイトが放った弾をギリギリまで引きつけ、一瞬の内に右に機体がスライドしてそれを回避する。通常のACでは考えられない動き方だった。

二機の勝敗が分からぬまま、また場面が切り替わる。

今度は心臓を鷲掴みにされた感覚に陥った。見覚えのある丘に佇んでいる少年と少女。その頭上を一機のAC……。

『ネクスト』とはなんだ?』

以前イリスに指摘された言葉を思い出す。あの時、昔の記憶を語

ついていた時に自然と口から滑り出ていた単語だ。その単語を初めて聞いたのは、レイヴンズアークの研究施設。いや、違うな。ネクストという単語が何を意味するものか最初から知っていた。知っていたが、知らない事を装っていただけだ。気づかない振りをしていただけだ。

「っー!」

口に手を当てその場に崩れ落ちるフェイス。もはや前を見る事も立ち上がる事も叶わないほどの衝撃を受けた。

『ここ数年の記憶が無い』

それは自分自身がイリスに言った言葉。そして真実。

「もう、分かったでしょう?」

何時の間にか辺りは以前の闇に覆われ、目の前にはアルフォードが立っていた。その表情は何処か悲しみの色に染まっていたことをうずくまるフェイスからは見えていない。

「君は……俺だな?」

「そして僕は君です」

全てが理解できる。アルフォードの存在も。この場所の事も。確かにここはあの世ではないはずだ。ここは、精神の世界。深層心理の世界とでもいうべき場所なのだから。

「あの日。あの場所で起きた『事故』により僕は記憶を無くしてしまった」

「そしてその日からフェイスという存在が生まれた。改ざんされた幼い過去の記憶を持ちながら、そうする事で自分自身の存在を確立する為に」

「この二年の間、僕は君の意識の底辺。深層心理を彷徨っていました。ですが、君も気づいている通り、僕の意識が表層に出始め、君の意識が深層心理に沈み始めている」

「一つの身体に生まれてしまった二つ目の人格……さぞ目障りだろうな」

「ええ。正直言って、僕はあなたが目障りです。あなたには消えて

欲しいと思っています」

ゆつくりとフェイスは瞳を閉じ、あの日、目を覚ました事を思う。レイヴンとなろうと決意した日の事を思う。忌まわしい記憶を捨て去った日の事を思う。ジドと再会して一緒に暮らし始めて、リリスと出会って、皆で一年過ごしてきた日々。そしてイリスの事を思う。

ゆつくりと瞳を開くと、そこはACのコクピット内。目の前には一機のACの様な機体があった。

「ここで消えてください、偽りの顔<sup>フェイス</sup>」

淡々と感情を排斥しながら事務的な言葉だけを投げかけて来るアルフォードに対し、フェイスはゆつくりと、口を開く。

「断る！」

ロードガーディアンのコアのブラスターから二つの白い閃光が放たれ、一直線に敵に向かう。瞬く間にブレードの射程内まで接近し下段からブレードを振り上げる。

ネクストはブレードの刃がコアに到達する直前にACの左腕部を右手で押さえ付ける。

「ロードガーディアン……」主を守護する”為の力で僕を倒すつもりですか」

「そうだ！」

「戦う事こそがレイヴンの本質ですか……良いでしょうその戦い受けます。レイヴンに敬意を表し僕も全力で」

目の前の機体が後ろに後退すると、上空に飛び立つ。

「このネクスト『ドミニオン・フェザー』であなたを……！」

背面に装備されている翼の形状をした大型スラスタから光が放たれ、もう一对の翼を形成すると同時に爆発的に加速し間合いを詰めて来る。どうやらあのスラスタはOBと連動しているらしい。

ブレードの射程内に近づけないようにリニアレールキャノンを連射しミサイルを放ちながら、後ろに後退する。

ドミニオン・フェザーはミサイルとレールキャノンに構わず突撃し、全ての弾が着弾する。それにも関わらず、何処も破損していな

いばかりか装甲に傷一つついていない。

「無駄です。」ノーマル”の火力なんてPAの前には無力です」  
プライマルアーマー

「あの時と同じ物か、だが！」

PAというバリアも完全な物ではないはずだ。完全な物ならば、先程のブレードの刃を止める必要が無い、射撃武器が駄目でも接近してのブレードなら、勝機はある。

後ろに後退するのを止め、前に接近しようとした時にコクピットの警報が鳴り響く。

四方からレーザーが接近していた。急いで回避するが、右肩のレーザーが掠めた部分が溶ける。

「くそっ、何処から!？」

更にレーザーが放たれ、回避するのが精一杯だ。

「これは……オービットか」

「そつちばかりに気を取られていると……」

目前にドミニオン・フェザーが迫り両腕のブレードを展開し頭上から振り下ろされたブレードの刃を左の方をブレードで受け止め、ロードガーディアンを右脚だけ後ろに一步下がり、右のブレードを回避する。

「なっ……!!」

ドミニオン・フェザーの翼が更に強く光を放つと同時にロードガーディアンが少しだけ宙に浮き後ろに押し返される。そのまま強く弾き飛ばされ、間合いを離すと同時にドミニオン・フェザーは左腕に装備しているグレネードを放つ。

グレネードが一直線にロードガーディアンに迫り、その内の二本が左腕を吹き飛ばし、更に続けて放ったグレネードが右腕を吹き飛ばす。

「これ以上の戦闘は無意味です」

「だからってまだ、俺は死ねない。待つてくれる人がいるから、皆がいるから!!」

「……」

「護りたい人がいるから!!」

残っている最後の武器であるミサイルを放つが、今度はドミニオン・フェザーに当たることもなく爆発する。続けてミサイルを撃とうとするが、ドミニオン・フェザーが放ったグレネードに撃ち抜かれる。

もはや抗う力さえ残されていなかった。フェイスの頬を雫が伝い、膝に落ちる。

「……フェイス。あなたが大切に思っている人達は僕が命を賭けて護り抜きます」

「そう言ってくれると、少しだけ……安心する」

「……すみません」

「どちらかが消えなくちゃいけないんだ。お前は力で勝ち取った。さあ、早く終止符を」

「どうか安らかに、そして今まで僕を『護って』くれてありがとう」

ドミニオン・フェザーの翼が羽ばたき右腕の特殊高出力レーザーライフル”ATA01 ROZEN・KURANTU”のトリガーを引き抜く。銃口にエネルギーが収縮された刹那、一気に解放され、巨大な爆発と共に青白い閃光がロードガーディアンを包み込んだ。

## PHASE 14 「再会」

「気がつきました？」

目の前に一人の女性の顔があった。黒くて長い髪を後ろでまとめ結いている、いわゆるポニーテールのアジア系の女性は安心した様な表情を作る。

「ここは……？」

ポニーテールの女性に手伝ってもらいながら身体を起こす。全身が包帯ぐるぐるで極めて酷い状態だが、身体の痛みは感じない。

「ここは私の隠れ家。君は私の隠れ家のすぐ側に落ちて来た。空からね」

「助けて頂きありがとうございます。僕は……」

名乗る途中で、ポニーテールの女性の顔を見たアルフォードは表情を一変させる。まるで幽霊でも見たかのように一瞬の内に青ざめる。

そんなアルフォードの反応を愉快そうに眺めていたポニーテールの女性が窓の外のAC用ガレージを指差しながら言う。

「私が丹精を込めて造った”ガーディアンイグナイト”をあんなボロボロにして、どう責任取ってくれるの？ フェイスさん……それとも？」

「ユウヒ”カシミヤ。あなたが僕を助けたのですか……」

「アルの方が。君が存在しているという事は、フェイスは？」

向けられた言葉に胸を痛めるが、隠す事はしなかった。真実をありのままに話す。自分がこの手でもう一人の人格を消し去った事をアルフォードの話を黙って静かに聞いていたユウヒは、話が終わると質問も追及もしなかった。その代わりに簡易キッチンで朝食を作りテーブルに乗せていく。

「毒なんか盛ってないわよ？」

「……はあ」

明らかに何かを疑っている様子のアルフォードが可笑しくてたまらないユウヒはコロコロと表情を変えていく。

この人は周りまで明るくしていきそうなタイプだと知ってはいても、知らず知らずに話をしてしまう自分が不思議だった。この方法で過去に何度軍事機密を口走りそうになった事か。

朝食を食べ始めると、今度はユウヒがアルフォード（フェイス）の整備士をしていた理由を話してくれる。その理由は二つあると言う。

一つは記憶を無くし、まるで別人になったアルフォードをからかったりしていると楽しかったからだそう。そしてもう一つは何時か記憶を取り戻したアルフォードと過去の事を笑いながら話し合いたかったというのがユウヒの言った理由だ。

それを説明した後に、ユウヒの頭の中から一つの面白い事が転がり出てくる。今度はフェイスの時とは違った反応が期待できると内心にやけながら、

「私ね、君の事前から好きだったんだよね。それもライクじゃなくラブなのっ！」

アホな発言をするのだった。

ユウヒのアホ発言を聞いた刹那、アルフォードは噉っていたみそ汁を勢いよく噴出し、その反動でみそ汁が鼻の穴の中に飛び散り苦しそうにむせる。

「な、な、な、なにを………いつて」

むせるわ、恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてとぼけるわで見ていて本当に面白かった。アルフォードのリアクションに満足したユウヒはさっき言ったことは冗談だと訂正するも、さらに追撃をかける。「冗談よ。だってアルには、愛しの人が……あれ？ そういえば相棒どうしたの？」

その言葉でアルフォードは下を向いて服を雑巾で拭っていたが、それを止めて顔を上げる。その顔ははにわよろしく面白い表情で沈黙する。

沈黙が五秒続いた矢先、迎撃ミサイルの如くアルフォードは叫ぶ。「忘れてたあああああ！ あいつ今何処にいるの！？ ユウヒさん知ってる！？」

「駄目だこりゃ、完全に取り乱してる」

勢いこんで腕を掴んできたアルフォードに軽くビンタを食らわして我に戻させる。我に戻ったアルフォードは急いで手を離し一言。

「はっ、僕は何を……」

「ネタが古い！ やり直し！！」

「え〜と。ボクハダレ？」

「残念。違う！ ってゆうか意味不明」

「武勇伝武勇伝！」

「それ以上言うとり返しつかない、やり直し！」

このままだと一生、リアクションやり直し地獄（命名・ユウヒ）から抜け出せないと判断したユウヒはかなり妥協してオツケーをだす。

「っとかなり脱線したけど、ユキちゃんの行方でしょ？ 知ってるって言ったらどうする？」

「何でもしますよ！」

「クスっ。本当に？」

そのユウヒの笑顔は破壊力抜群だった。その笑顔を見たならアルフォードは怯え苦しみ、ちびりそうな笑顔だった。初心な思春期真っ盛りの少年が見たなら一発で恋に落ちてしまいそうなパーフェクトスマイルである。

「……で、出来る限りで勘弁してください」

「よし。なら、今日から私の事をユウちゃんと呼ぶように！」

「え、ごめん無理」

「おお、中々のリアクション。八十点！」

必死の抵抗も虚しく、リアクションの点数で流されてしまいアルフォードは早く言うように強要される。

そんな呼び方、今まで誰にもしたことなんて無いし、それに年齢

の近い女の人に言うなんて、とてもじゃないが出来ない。という自分とそうしなければ大切な仲間の居場所が分からないので言う事を聞くしかないという自分が居る。

ユウヒの事について補足しておく、年齢はアルフォードより下の十九歳。年下に手玉に取られているアルフォードの立つ瀬が無いので一応弁解しておくが、一年の差などそれほど大したものでもないだろうし、これまでの人生でより多くのことを感じ取ってきたのだろう。ちなみに元レイヴンである彼女はACの操縦技術は群を抜いている。更にAC操縦技術だけでなく、発想が豊かに加え転換も卓越している。そのためか今までも数多くの独自の兵器を開発している。

”特殊強襲型試作ACガーディアンイグナイト”はユウヒが独自の理論を持つて開発した試作機だ。AC初の空中戦を想定した機体で、機動性が非常に高く、恐らく存在するACの中でも右に出る機体は無いと思われる。更にユウヒ自身が考案、開発した特殊武装を装備し非常にポテンシャルの高いACと言えるだろう。

さて、観念したアルフォードは深呼吸を繰り返し、心を静める。辺りにまるで、競技スタート直前の緊張感が漂う。

「……オレ」

「あっ、オレンジジュース飲もつと」

瞬時にアルフォードの意図に気づき、一瞬の判断で言うてはいけない禁止ネタを阻止する。間違いなくできる。

「さて、話の続き」

「さてと、じゃあどうぞ。はいユウちゃんって言うて御覧なさい」  
そのままの流れで流そうかと思っていたが、無理だった。アルフォードが内心舌打ちをしたのは言うまでもない。

「ユ、ユウちゃん？」

「疑問系なのが気に食わないけど、まあいいでしょう」

大役をこなし、ほっと胸を撫で下ろすアルフォードに落ち着く暇を与えず、ユウヒが約束通り、アルフォードの仲間の居場所を告げ

る。

「ユキちゃんね、レイヴンズアークにいたわよ」

「へ？ へえ!？」

そこまで言われて初めて気がついた。そういえば、つい最近に会っていると言う事を。まあ、その時はまだアルフォードではなかったのだが。

もっと早く思い出していれば、あんな葛藤をしなかったのになあ。あれ、でもちよっと待って。

「何で過去形？」

「うん。じゃあ一ヶ月ばかり眠りこけていたアルの為に、今の情勢の説明をするね」

「い、一ヶ月って……」

ユウヒの説明によると、国家特殊部隊「フライトナーズ」の反乱をきっかけにそれまで争いあっていた企業同士が国家に代わりこの世界を支配しようとして互いに結託し連合統合機構”アライアンス”を結成しレイヴンと企業の私兵から組織された”アライアンス戦術部隊”を設立。S T A L 決戦の際に国家に宣戦布告をしてきた。

それに対する国家側はこれもまた「フライトナーズ」反乱をきっかけとして結成されたほぼ全てのレイヴンが参加する連合軍で対抗するかと思われたが、数々の思惑が絡み合い、あえなく瓦解。レイヴンの中でも多くは高額金を支払う”アライアンス”側に味方する者も多く現れる。

そんな中レイヴンズアークが”アライアンス”の攻撃を受け、崩壊。主宰であったジャック・Oも死亡したと噂された。レイヴンズアークは最後まで”アライアンス”に抗い続けていたが、そこが陥落したことにより、”アライアンス”を止めようとする者はいなくなった。だが、つい最近死んだと噂されていたジャック・Oが姿を現し、私設武装集団”パーテックス”を設立し”アライアンス”に戦いを挑んだ。そして今現在の戦況は膠着状態である。

レイヴンと呼ばれる者は、”アライアンス”に与するか”パーテ

ツクス”に与するかを選択を迫られていた。

数いるレイヴンの中にはどちらの組織にも関与せず中立の独立組織を結成した者もいる。

「ナインブレイカーというACを駆るレイヴンはどちら側にいるんですか？」

「イリスね。彼女はジャック・O指揮下のパーテックスに所属しているわ。彼女だけじゃない、レイヴンの中でも腕利きと言われているほとんどが、パーテックスに所属している」

圧倒的に物量で勝っているアライアンスにパーテックスが同等に戦えている事の大きな要因はレイヴンの力によるものだ。

イリスを始めとして、ハスラーワンやジャウザー、鳥大老。リム・ファイヤーに、ンジャムジャ。ライウンなどの実力派レイヴンがパーテックスに所属している事が大きい。

一方のアライアンスにもイリスやハスラーワンと同等の力を持つレイヴンがいる。デュアル・フェイスと呼ばれるACを駆るジノヴィと彼の恋人であるアグライヤの二人が作戦への影響力が大きい。一通りの説明を終えたユウヒは、難しい顔をして何かを考え込んでいるアルフォードに向かっていた。ずらな笑みを向ける。

「それで？ どっちにつく？」

「……僕は、いや僕達がこの世界の紛争に参加するのは……」

「ユキちゃんはパーテックスにいるわよ？ それにフェイスさんが大切に思っていた人たちも」

「……彼の約束は果たします。不本意ですが、パーテックスに参加し、戦争を終わらせ。僕達は『あるべき世界へ帰りましょう』」

「そうこなくちゃ」

料理の皿を洗いながら、ユウヒは自分もACに搭乗しパーテックスとして戦う事をアルフォードに告げる。アルフォードはそれを止めようとはしない、ユウヒと”ガーディアンイグナイト”が味方であれば、これほど頼もしい事はない。

過去に”コジマ技術”を流用していないノーマルでネクストと互

角以上に戦えた唯一の存在なのだから。

「そういえば、この世界の何処に自分の愛機『ドミニオン・フェザール』があるのだろうか」と疑問に思う。何処かに隠してあるのだろうか。

その時、フェイスの時の記憶が鮮明に蘇る。レイヴンズアーク管理のあの研究施設の演習区域で戦ったあの機体は紛れもなくユキの搭乗機であるネクスト『デイルテイメント』だった。恐らく街かレイヴンリストの中で見掛けたフェイスを見て、もしかして思いあの依頼を申し込んだのか。いや、だがジャックには何か別の思惑があった様に思えるし、そのどちらともか。

「さてと」

皿を洗い終え、エプロンを外すと右手でブイサインを作る。

「まずはアルの『翼』を取り戻さなきゃね。どこにぶち込まれてるのか、あてはあるんでしょ？」

「ああ。レイヴンズアークの管理区域だった研究施設だ」  
位置を確認するとユウヒの秘密基地からそう遠くは無い。ガードイアンイグナイトのフライトユニットを使えば充分辿り着ける範囲だ。

「さて、行きますか！」

「ACってこれ一機ですか？」

「文句言わない。どうせネクスト奪還するんだから良いでしょう？」

「さあて私の技術に酔いしれなさい」

「ああ。無謀な操縦に別な意味で酔いそうですね」

## PHASE 15 「狂乱の嬉遊曲」

機体の保管環境をチェックする為に、一人研究施設を訪れていたマーヤは研究員から一通り説明を受けた後、施設の中を視察していた。

本来ならこの世界の人達にネクストに流用している技術を調べさせるのは本意ではない。だが、こうしなければいざという時にネクストが整備不良で動かないなんて事にはさせたくない。もし、彼が帰ってきた時に愛機が動かないんじゃ、どうしようもないもの。

研究施設のラウンジでコーヒーを飲みながら、窓の外を眺める。最近ではアライアンスとの戦いも激化して来ている。もう少し警備部隊を増やした方が得策かと考える。

前にレイヴンズネストの二人のレイヴンに襲われた時は、こちらにもデータを取るべき一人のレイヴンがいたので問題は無かった。だからこそ警備を薄くし、侵入を許したのだ。だが、今はあの時とは違う。

「フェイスIIフェザー」

データを取るべきレイヴンの一人だった青年。無名ながらも数々の難しい依頼から生還してきた事実。そして時折見せるその実力の片鱗。彼こそがジャックが求める”ドミナント”だとしたら。

いや、彼はもう死んでいる。一ヶ月前にアライアンス戦術部隊の隊長である、エヴァンジュにACを破壊されてしまった。恐らく生きてはいないだろう。これで、真相は分からずじまいだ。彼が”ドミナント”であった可能性も。そして彼であった可能性も。

一体今頃は何処にいるのだろうか。生きているのだろうか。一体どれほど探し回っただろう。彼を探す為にマーヤはジャックの側近を務めるようになった。ジャックの側近をしていればそれだけで色々な情報が入ってくる。

それでも、結局見つからなかった。

残ったコーヒーを飲み干すと。窓の外で何かが光った。なんだろうと思いき身を屈め窓の外を凝視する。

外には何も無かったが突如爆発音が聞こえ、後ろから書類やらゴミ箱やらが風圧に飛ばされてくる。

「きゃあああ!?!」

マーヤ自身も飛ばされ、窓に叩きつけられるがガラスが割れなかっただけマシだった。高台に建設されているのでもし落ちれば死ぬのは確実だ。

素早く立ち上がり、研究所の奥に向かい管制室のドアを乱暴に開ける。

「何事ですか!?! 状況説明をして下さい!」

管制室は混乱に包まれ、誰も正確な状況を把握できていなかった。まさか警備部隊を増やそうかと思っていた矢先にこんな事が起きるなんて。

「それにしても、何故ここを……」

今度はアラーム音が管制室に鳴り響く。これは地下に保管されているネクストに何かがあった時に鳴る警報システムだった。マーヤは不安に駆り立てられる。

「今度は何事ですか!?!」

「そ、それが地下格納庫の一機……が起動しています!」

「なっ!?! ドミニオン・フェザーが起動している!?!」

それだけはいえなはずだった。あれを起動させることが出来るのは本人だけのようにプロテクトを賭けたはずだ。それすらも破られたというのか。

「ディペルテイメントを使います。全プロテクト解除。外部操作でシステムを起動させなさい。ここの指揮はラズフェルト。あなたに任せます」

「はっ。どうかご無事で」

ラズフェルトと呼ばれた研究員は管制室を出て行くマーヤの後姿を眺める。出来れば、彼女に戦いに赴いて欲しくはない。ラズフェ

ルトはマーヤに恋心を抱く反面、力の無い自分を齒痒く感じていた。地下格納庫に着いたマーヤは、既にメインシステムが起動しているネクスト。ディペルメントに乗り込み、シートに座ると身体をベルトで固定すると即座に機体をカタパルトに移動させる。

「カタパルト射出」

「了解。カタパルト射出します」

Gが襲い掛かり凄まじい速度で上昇していき、無理矢理こじ開けられたハッチから外に飛び出ると、既に警備部隊と二機のACが交戦していた。その内の一機はネクスト。ドミニオン・フェザーだった。

強奪犯はとて、ネクストを操縦した事が無い人間とは思えなかった。自分の手足の様にドミニオン・フェザーを操り警備部隊を翻弄している。その姿は何処かアルフォードが駆るドミニオン・フェザーの姿と重なって見える。

「気に入らない、あの機体を操っていいのは……」

それがマーヤには我慢がならなかった。自分でも頭に血が昇って行くのがよく分かる。分かるが、どうしようもない。

頭の中でスイッチが切り替わるとそれに呼応するかのようディペルテイメントのオーバードブースターから閃光が放たれる。

数分前。ガーディアンイグナイトは警備部隊に気づかれないうつ、上空から研究施設を眺めていた。

配置されている警備部隊は前とは比べ物にならないくらい多い。ここで戦闘を始めたら多少なりとも時間を消費してしまう。

「あまり戦闘は避けたいけど、仕方がない。正面突破するよ！」

「待った。戦闘する必要ないんじゃないですか？ ユキにさえ会えれば……」

「……ごめん、もう無理」

「へっ!？」

「ミサイル撃っちゃった」

急いでモニターを見ると、目の前を十二発のミサイルが飛んでいくのが見えた。それはこの機体の左肩に装備されているミサイル「飛礫」は程なくして研究施設に着弾。穴を開ける。

「こ、これからパーテックスに参加するということに……」

「男なんだから細かい事にしないの!」

警備部隊のMTの射撃を滅茶苦茶な操縦で回避しながら、ミサイルで空けた穴に向かう。穴の上空に來ると、機体を降下させハッチを開ける。

「行つて来なさい。飛ぶ為の『翼』を取り戻しなさい」

「分かつてます」

飛び降りたアルフォードは、研究員や警備員に見つからない様にドミニオン・フェザーが保管されている格納庫を探す。途中研究員に見つかったので、仕方なく声を出される前に口を塞ぎ、ナイフを首筋に当てる。

「正直に答えれば命は助けます。いいですね?」

研究員はコクコクと首を縦に振る。

「ネクスト……あなたたちが研究している最新鋭機は何処ですか?」

「そ、それは……」

ナイフを持っている手に少しだけ力を加える。

「ひっ! 待ってくれ、地下だ! 地下格納庫にある」

「行く為には?」

「このカードキーを直通エレベーターに認証させるだけだ」

「そうですか」

カードキーを受け取ると、持っていたナイフの柄で後頭部を強打し気絶させ、適当に見つけにくい場所に横にさせる。

「地下か」

さっきの攻撃によって全ての回線が遮断されていたり、機密保持

の為にコードが変えられたりしていると面倒だが、幸いそんな事は無かった。

「突然の事でそんな事じゃないか……随分無能な連中がここを管理しているんだな」

もしかしたらここが攻撃される事なんか絶対に無いとたかをくくっていたのかもしれない。

そんな事を考えていると、エレベーターが止まり扉が開く。エレベーターを出ると、エレベーターを上に戻し、ハンガーに収納されている一機の機体に視線を向ける。

自分の愛機である、ドミニオン・フェザーを見上げ懐かしい気分浸っているとユウヒからの通信がその気分を台無しにする。

「ちんたらしないでね。感傷なんか浸ってたらあとで背後から撃ち抜くから」

「わ、分かっていますよ」

何とも物騒な物言いだろうか。それに少しだけ感傷に浸ってしまった。よもや背後から撃ち抜かれないうらな。

多少不安になりながらも、ドミニオン・フェザーに乗り込むとメインシステムを起動させるが、どうやらプロテクトが掛かっているらしい。パスワード入力とあった。

「パスワード？　まずいなそんな物を設定した覚えは……」

『汝が真に忠誠を誓う物はなんだ？』

スクリーンに言葉が表示される。それを見た瞬間アルフォードには答えが浮かび上がる。

「そうか、そういう事か」

少し困ったが、本人ならば即座に分かるパスワードだった為、簡単に突破する。次に生体認証を行うが、これも本人だから問題無し。全てのプロテクトを解除し、メインシステムが立ち上がるまでに、機体状態を確認する。

「バックブースター感度良好。サイド、メイン、オーバードブースターも問題なし。スタビライザー設定問題なし。全兵装に実弾搭載

及びエネルギー補給済み。システムオールグリーン。良く整備されている」

オーバードブースターを起動させるとコアに付けられたブースターから閃光が噴出し、機体が浮かび上がる。

本来ならカタパルトで射出される斜面をオーバードブースターで一気上昇しハッチを左腕に装備されているグレネードで無理矢理破壊する。

外に出ると、ガーディアンイグナイトが「飛翔」を警備部隊のMTに突き刺していた。最もコクピットと爆発する部分を避けているので、機体が爆発もしなければ搭乗者が命を落すことは無い。

「お待たせしました。離脱しましょう」

「そうしたいけどね。どうやらまだ無理みたい。警備部隊が真面目なのよね」

確かに既に二機は取り囲まれ、今すぐに一斉射撃をして来そうな雰囲気だ。背を向けたら間違いなく撃たれるか。

撃たれた所でドミニオン・フェザーには何の問題は無いが、むしろ、

「そつちは大丈夫でも。この子がダメなのよ。これでも一応通常のACなんだから。ブースターに直撃したら死ぬしかないっての！」

問題はガーディアンイグナイトだろう。MTごときの武装で装甲が抜ける訳がないが、万一ブースターに直撃したら確かに死ぬしかない。アルフォードは浅く溜息をつく。

「仕方が無い。警備部隊を撃破します」

「オツケー。でも私達は命を奪う為にここに来たんじゃない。分かっているよね？」

「兵装だけ奪いましょう」

「上出来。行くよ！」

ユウヒの合図でドミニオン・フェザーとガーディアンイグナイトがそれぞれ逆方向に移動を開始する。

突然のアタックに警備部隊は闇雲にミサイルやライフルを撃ちま

くるが、ガーディアンイグナイトはそれを全て回避し右腕装備マシンガン「時雨」で肩のミサイルを撃ち抜き。さらに両腕が武器になっっているため「飛翔」で両腕を切断する。

「あ……ああ……？」

確実に死を覚悟したが、生きている事に呆然とするMTの搭乗者。目の前のACはもう自分には目をくれず次の標的に接近していった。一方のドミニオン・フェザーは回避する事をせずにPAで攻撃を防ぎながら、接近戦に持ち込み両腕のブレードで武装のみを破壊していく。

「PAは正常稼働してくれる。次は回避行動バランスチェックかな」  
それまでの戦い方とは違って変わり、右に左にサイドブーストを使用し真横に瞬時に移動するクイックブーストを多用しMT部隊をかく乱する。

照準が定まらないまま、一瞬の内に接近され正確に兵装だけを奪うと即座にクイックブーストで他の敵の照準を外す。

「な、なんだこいつ!? 速い……! うわあ!!」

「隊長!! くそっ!! こいつら!!」

隊長機を実剣で貫いたACをロックするが、突然目の前からそのACの姿が消える。慌ててリーダーを確認するが反応が無い。

「う、うわあああ!!」

恐怖に駆られ闇雲に撃ち続けていると、上空に敵の反応が現れる。急いで上を向くと実剣を構え落下してくる一機のACがあった。そのACは乱射されるマシンガンの弾をもともせず接近し、MTの右腕を切り落とすと間髪を入れず、機体を回しながら上体を起こし下段からの斬り上げでメインカメラを吹き飛ばす。

残るMTは二機だが、二機にドミニオン・フェザーがクイックブーストで右に左に瞬時に移動しながら距離を詰めていく。

機体の戦闘チェックを終了したアルフォードが本気で動かしているのだ。その速さは肉眼では捉えきれない。一瞬見えたと思ってもすぐに視界から消えてしまう。よくあの機体と交戦し破壊されな

つたとユウヒは今更ながらに思う。

ドミニオン・フェザーが両腕のブレードを振りかざした瞬間。右側面から通常のACではありえない速度で接近する機影があった。

「貴様あああ！　貴様なんかはその機体を渡すものか！！」

聞き覚えのある叫び声ととてつもない殺気を感じ、目の前のMT二機をよりも先に対処すべきだと判断したアルフォードはバックブースターとサイドブースターを同時に使用し、右側に機体を向ける。「ディペルテイメント……ユキ！？　僕だ。アルフォード……」

迫り来るディペルメントに対してオープンチャンネルで呼び掛けを試みるが、

「黙れ！　その機体返してもらおう！！」

聞く耳持たずの問答無用だった。こうなってしまうては戦うしかない。全兵装を起動させ迫り来るディペルメントに照準を合わせる。ネクスト同士の戦闘自体が久しぶりに加え、誤って破壊してしまつたら取り返しがつかない。だが、後者は向こうも同じ。はずなのだが目の前のディペルメントが見覚えのある、兵装を起動させる。

「コジマキャノン……まさか使う気か？」

いくらドミニオン・フェザーと言えど一撃必殺の破壊力を誇る「コジマキャノン」の直撃なんか食らつたら一撃で塵とされる。

メインブースターから炎が噴出する。さしてタイムログも無く、ドミニオン・フェザーが滑らかに移動を開始すると同時にディペルメントからコジマキャノンが発射される。サイドブースターから閃光が放たれ、クイツクブーラストで真横に回避し、同時に前へと進む。後方に着弾したコジマキャノンが巨大な爆発を引き起こし。着弾点の周囲にぼつかりと大穴が空けていた。

「ユウヒさん、大丈夫ですか！？　生きていますか！？」

「大丈夫。だけど、何あの兵器。ACの核ミサイル以上の威力じゃない」

ディペルテイメントは二脚型脚部に重武装を施した機体だ。その火力はネクストの中でも群を抜いている。その反面接近戦に持ち込

まれると、なす術が無いという弱点を持つ。それをよく知っているアルフォードはクイックブリストをクイックブリストを今まで以上の速さで多用する。一瞬たりとも同じ場所に留まれば、殺られる。

弾丸を右、ミサイルを斜め前。レーザーキャノンに左、グレネードを右と回避し次に右にスライドする、

「むかつく……むかつくね！ その機体を乗りこなす貴様が！！」  
「っち、しまった！」

「なまじ扱えるからって……いい気になるなあ！！」

瞬間目の前にレーザーキャノンが目前に迫っていた。ディペルメントが初弾を放った後に続けてドミニオン・フェザーが回避するであろう先に次弾を撃ち込んでいた。

これは無闇に撃った訳ではない。最初から一つの逃げ道だけを作っておき、そこに逃げ込んだ瞬間目の前には砲撃が迫り直撃。撃破するという立派な戦術である。それにより次にどうするかを先に読まれているかの様な錯覚を相手に思わせ戦闘の主導権を握り、戦場を自分の思う通りにコントロールする。先を読む力、大局を見通せる者にしか出来ない芸当だ。

下手に逃げるより、機体全体でレーザーキャノンを受け止める。PAを常時展開している為、装甲に目立った損傷は無いが、この着弾によりドミニオン・フェザーの反応がほんの少しだけ鈍る。

回避した先が実はユキの作った唯一の逃げ道ではないかと疑心暗鬼になっているからだ。

逃げ道が誘いなら、多少強引に距離を縮めていくだけで。装甲を掠めていっても構わない。ノーマルよりも装甲が厚くなっているのに加え、PAを展開しているので多少着弾したとしても、よほどの高火力でなければそう簡単に装甲を抜けるはずがない。

爆煙がスクリーンを覆い、視界が塞がれる。煙を突っ切ると目の前にレーザーキャノンの光が見える。それをクイックブリストで左に回避すると同時に背面の大型スラスタの翼を展開する。

瞬間的な限界突破の加速で肉眼では視認出来ない速さで一気にデ

イペルテイメントに迫り、接近戦に持ち込むと両腕でディペルテイメントを押さえ付け、ドミニオン・フェザーのコクピットのハッチを開ける。

いかにもバイトに遅刻したような顔をして、右手で後頭部を押さえ「チイス」とでも言うつもりポーズで搭乗者が降りてくる。

降りてきた搭乗者の顔を見た瞬間操縦桿を握る手が、力なく操縦桿から離される。

冷静になって考えてみれば、AMS適正がないような者にネクストが動かせるはずがなかった。この世界の人間にあそこまでドミニオン・フェザーを動かせる者など一人を除いて存在するはずが無かったのだ。

両手で口元を覆い、頬を一筋の雫が伝っていく。

どれほど、どれほどこの瞬間を待ち望んでいた事か。ディペルテイメントのハッチを開き、目の前にいる青年に向かって屈託のない笑顔を向ける。

「おかえりなさい。アルフォード」

「ただいま。ユキ」

二人の様子を二機残っていたMTのメインカメラを吹き飛ばし行動不能にした、ガーディアンイグナイトのコクピットの中で面白そうにユウヒが眺めていた。するとおもむろにズポンのポケットからメモ張を取り出し何かを書き込んでいく。

「ユキ!!ラドルフ。二重人格疑惑。特にキレると人格が変わる……つと。よし、これでまたあの二人をからかうネタが増えたわ。うふふふ」

丸秘ネタ張を口元に当てながら、こちらもまた満面の笑みでアルフォードを見つめていた。

番外編：シーン1「青春日記」（前書き）

この物語は本編より少し前の話です。本編とはあまり関わりがありませんが、多少なりとも関わりを持つのでどうか、お読みください。

## 番外編：シーン1「青春日記」

前回の作戦時の詳細データに目を通しながら、私は苛立っていた。自分が開発したACの性能を遙かに凌ぐ、正体不明機の存在が不愉快で仕方なかった。

突如飛来した正体不明機は実験機を撃破。その後飛び去っていった。その失態によりクローム社からの研究資金援助が打ち切られ、またレイヴンとして活動する事により資金調達するしかない。その点もこの上ない程むかつく。

鏡の前に立ち、長い髪をポニーテールにするために縛っていく。鏡に映し出された私の顔はアジア系。つまり日本人だ。もっともこの世界にはもはやそんな国は存在しない。

昔の言葉で言う所の、私は日本人の末裔だろう。ま、そんなことどうでもいいけど。

ノートパソコンで依頼内容を確認してから、ガレージへと向かう。AC用ガレージには私が丹精込めて、持てる技術の全てを注ぎ込んで一から造り上げたオリジナルAC”闇光”がハンガーに収められている。

私はACに乗り込むと慣れた手つきでメインシステムを起動させていく。最近の研究に没頭していたからACに乗って戦うなんて半年振りくらいだった。

ま、どんなにブランクがあつたってノープロブレム！ なんとつて天才だからね。

今回の依頼はムラクモ・ミレニアム社からの依頼で、クロームの新型レーダーを奪取することが目的だ。まさに今の私の心境にぴったりの依頼といえる。たつた一度の失態で研究資金を打ち切りやがったクローム社へ正義の鉄槌を食らわしてくれる。

なんて息巻いて出撃したのはいいけどさ、予想外の警備部隊の前にかなりピンチに陥っている。

全くクローム奴らめ、私を切り捨てておきながら、私の研究の証である新型MTとACを配置しているなんて、なんと言う不届きな奴らだ。

「しか し！！ ただの量産機ごときに私が心血注いで造り上げたこのACに勝てるものか！」

柱の影に隠れ身を隠していた私は、敵の射撃が途切れるのを見計らって敵の正面へと躍り出る。

急いで敵がこっちを狙ってくるのが手に取る様に分かる。でも、一瞬の反応が遅れた事が命取りだったね。

「なっ！？ 馬鹿な！」

離れた間合いから、通常ではありえない速度で接近した私のACに驚愕の声を上げる敵ACのパイロット。驚いてくれてなによりだ。でもね、

「これで終わり！ 正義の鉄槌を食らえ！」

闇光の腰部分に取り付けておいた短剣を両手に持ち、敵ACの頭部とコアを接続している関節部分を狙う。実は敵ACを動かすための伝達司令を司る部分はそこに存在している。

開発者ならではのピンポイント攻撃だ。命まではとりはしない。

私は人を殺すのが嫌いだ。あんな思いもうしたくない。

全ての敵戦力を破壊したは、いいが闇光も随分な損傷を受けてしまった。残っている武器も小型短剣のみだし。

「ああ……！ 成功報酬から機体の修理や弾薬補給代を引くと、トントンがいいところね」

新型レーダーを専用のケースに入れると、急いで私設の外に出る。「うそ……！？」

私設は既に取り囲まれていた。サーチライトの光がこちらに向いているしMT部隊やらAC部隊が続々と輸送機から降下してきている。

まさか、私の人生ここで終了？

「冗談じゃない！！ 素敵な彼氏も出来ていないってのに死んでた

まるもんですかー!!」

こんな事もあるつか逃走用に試作型ではあるけど特殊ブースターをコアに積んでいるですからね。

「ポチつとな」

起動ボタンを押すと、モニター上にACの立体映像が現れコアを赤く示し始める。程なくしてGが襲い掛かってくる。予想以上のそのGに顔を歪めながらも前を見据え、敵防衛隊を突破する。

突破したはいいが、すぐに特殊ブースターがその炎上、爆発し。

闇光が吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

かなりの衝撃が襲ったが、どうにかこうにか意識だけは失っていない。早くここから逃げ出さなくちゃ。

「!?!」

うそ。うそよ、これしきの事で私が造り上げた闇光が動かなくなるなんて。

「動いて、動けこのアホ!!」

悪態をついてみても、闇光はうんともすんとも言わない。こりゃ完全に駄目だ。クローム者の奴らも追ってきているだろうし、万策尽きた。ならここは潔く。

「我が人生に一片の悔いなし!」

って悔いあるって!! まだまだしたいことたくさんあるから!

誰にも負けないACだって造りたいし! 素敵な彼氏も作りたいし!!」

「ああ!! 誰か助ける!! いや、助けてくださいいいいい!!」

「面白い人だ。オープンチャンネルでさっきから喋り続けるなんて」

「えっ?」

突然聞こえた通信に驚いている暇もなく二機の見慣れないACがクロームの部隊に戦いを挑んでいた。

「そんな……たった二機で!? 自殺行為よ!」

クロームの部隊は私が開発した兵器を使用している。その性能は私自身が一番良く知っていた。私はその二機のACが死に行くよ

うな物だと思った。でも、実際は違っていた。

一機のゴツイ方が遠距離使用のACらしく、グレネードやらミサイルやらを後方から正確に撃ち続け、もう一機の方が前衛らしく敵の部隊へと突っ込んでいく。

傍から見ているだけでも、二機の息がぴったり合っている事がわかる。仲間には当たらないように細心の注意を払いながら、敵に牽制射撃を行い。仲間のACを後ろから狙っている敵を撃ち抜いている。

前衛を担当している方も、味方の援護射撃に絶対の信頼を寄せているのか好き勝手に動き回っていた。普通敵部隊にあんなに接近して動き回ると、後衛は味方に当たると攻撃をしないものだが、この二人は違う。互いに信頼しあっているんだ。

あいつなら、絶対に当たらない。あいつなら絶対に避けられる。きっとそう思っているに違いない。

そして私は見た。見間違はずがない、あれこそを天使と呼ぶのだろう。前衛の方のACの背面から巨大な一対の青い翼が出現した。その翼は本当に鳥の羽のように、羽ばたかせることに周囲に羽毛が散っていく。なんて神々しく、美しい姿なのだろうか。

あつと言つ間にクロームの部隊を全滅させた二機は私の闇光に近寄ってくる。

「大丈夫ですか？ 怪我とかは？」

「あ。大丈夫……です」

優しそうな少年の声だった。丁寧な口調からは確かな気遣いが感じられる。

「AC動きます？」

「いえ、もう全然」

しばらく少年からの返答が無い。多分仲間と相談しているのかな？「助けてやるうぜ」的なことを言う私に話しかけてきた少年と「めんどくせえよ」的なことを言っているであろう正確が悪い男。なんて勝手な妄想をしていると少年からの返答が帰ってきた。

「じゃあ、僕達がACをガレージまで運びます。案内してもらえま

すか？」

「え、ええ！ もちろん」

願ってもない申し出だった。これはかなりの幸運なんたる幸福！  
そしてこのまま優しそうな少年と行く所まで行くと言うのはどう  
だろうか？

「折角助けてもらったんだし、上がって行きませんか？」

「いえ、でももう遅いですし」

「あ！ だったら泊まって行くとか。料理なら自信ありますし」

「そう？ そこまで言うのなら……」

またもや妄想にふけていた私を現実世界に呼び戻したのは、優  
しそうな少年の声。

「え〜と、ここで良いの？」

気がつけば、私の秘密基地まで到着していた。よし作戦実行！

「あ、あの」

返答なし。

「……あの〜？」

返答が無いまま、二機のACは飛び立っていつてしまう。

「えっ！？ ちょ、カムバ〜ク！」

結局二機のACはどこぞへと行ってしまったし。その日からまた  
会うことなんて無いのかな、なんて思っていたながら日付けだけが、  
過ぎて行った。

そんなある日の事。ついに理論上の機体が完成した。

「ふふふ。これよついに完成したわ！ これこそ特殊強襲型試作A

C！ その名もガーディアンイグナイト！」

レイヴンとして活動して稼いだ金のほぼ全てを注ぎ込んだ傑作機  
だ。さらにAC初の空中戦を想定してフライトユニット「飛翔」も  
積んである。

「あれ？ 飛翔……？ あ〜！？」

これは私としてはうっかりした事だった。パーツには名称をつけ  
るのは当たり前だが、飛翔という名前を二つのパーツに付けてしま

った。一つは、フライトユニット。もう一つは剣。さあてどうしよう？

極めて重大かつ重要な問題に私が悶絶していると、通信が入る。「なによ、もうっ！ はいもしもし誰ですかこの……えっ!?」通信の内容は、アビスにてプロジェクトファンタズマで造り上げていた兵器。ファンタズマが破壊されたらしい。

確かあの機体には私のフライトユニットの理論を応用した物を提供した覚えがある。

「ふふう。私のガーディアンイグナイトの格好のテストの的ね！」意気揚々とACに乗り込むと、即座に空へと向かって飛び立つ。

目指すはファンタズマを破壊したというAC！ この子の力を思い知らせてやるわー！！

そうして私は、あの優しそうな少年が駆る規格外とんでもAC『ドミニオン・フェザー』と再会した。もちろん勝負を挑んだけど。

結果は……ま、どうでもいいよね！ こうして今私が生きているんだから、負けたって訳じゃないんだから！！

あ、追記。何かあの少年の相棒。女だった。それもめっちゃ可愛かった。そして巨乳だった。私も負けてられない！！ どうやらあの少年は負の遺産。古代人達が残したロスト・テクノロジーの遺跡に向かったようだ。私も後を追わなきゃ！！

最後に。もし私が二度とこの家に帰ってこなくて、もしこの記している日記を読んだ者がいるのならその人はラッキー！！ 私の研究を引き継ぎなさい！ ち・な・み・に拒否は不可！！ この家を破壊したり日記を捨てたら、地獄の底からでも正義の鉄槌を食らわしてやるんだから！ 以上！ あ、ちなみに十七歳ね常時彼氏募集中だからよろしく。つまない男だったら、ガーディアンイグナイトで踏みつぶしてあげる。

著者・世紀の大天才・ユウヒカシミヤ

著書・インパクトブルー的な青春より。

番外編：シーン1「青春日記」（後書き）

どうも。作者の長月夏です。そして今の季節も夏です。はい、関係ありませんね。

今回のお話は本編よりも少し前の話です。ユウヒさんの年齢を確かめれば、何年前の時代かは分かりますね。少し意外なユウヒさんの一面でした。

今後も物語の進行に合わせて、誰かの番外編が出来ればいいと思います。お読み下さりありがとうございます。今後ともよろしく願います。

そして、今は夏です。はい、関係ないですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1827c/>

---

ARMORED CORE ANOTHER EPISODE

2010年10月9日02時15分発行